

Letter for Members

【コンテンツ】

● 理事長ご挨拶	1
● JPS student clinical skills competition	2
● 令和7年度定時総会、臨時総会	3
● 渉外委員会報告	4
● 第134回学術大会	5
— 第134回学術大会開催	
— 令和7年度認定医・専門医筆記試験	
— 令和7年度専門医研修会報告	
— シンポジウム開催報告	
— 市民フォーラム開催報告	
● 受賞者の声	15
令和6年度学会優秀論文賞	
優秀論文賞	
奨励論文賞	
JPR Best Paper Award Review Article 部門	
JPR Best Paper Award Original Article 部門	

第134回学術大会優秀賞	
課題口演賞	
課題口演優秀賞	
デンツプライシロナ賞	
カボプランメカ賞	
● Prosthodontic Meeting for	
Next Generation 2025 開催報告	26
● 社会連携委員会の活動報告	27
● JPR 編集委員会	28
● 日本顎咬合学会との調印式	29
● 補綴歯科って何？キャンペーン	30
● 会員増計画作成ワークショップ	31
● JPS 将来構想ワークショップ	32
● FLiP 14 in Nagasaki を終えて	33
● 受賞者の声	35
令和6年度日本補綴歯科学会	
特別功労賞	
学術賞	

理事長ご挨拶



本年6月より（公社）日本補綴歯科学会の理事長を拝命しました。すでに就任から3か月が経過しましたが、すべての委員会には開始早々から誇りとなる精力的な活動をしていただいております。委員会の先生方のご尽力に心から感謝しながら、会員の先生方のご要望に応える学会運営を目指しているところです。

ところで「補綴歯科専門医」が日本歯科専門医機構より認証されてから、早くも3年が経過しました。このシステムを定着、充実させるためにも、①国民に尊敬される補綴歯科専門医を育成するための環境づくり、②専門医を取得することのメリットやインセンティブの明示、③専門医取得までのロードマップの作成を検討しています。そして何と言っても、「補綴」という用語の国民への周知が重要です。会員の先生方にもそれぞれの立場からぜひご協力を賜りたいと存じます。

とはいえ、現状での補綴歯科専門医数はあまりにも

少ないと実感しています。若い先生方には、歯科診療を包括する補綴歯科専門医をぜひ目指してほしいと希望します。ご存知のように補綴治療には口腔内をダイナミックに変革する面白味や醍醐味があります。特にデジタル技術が飛躍的に発展し、AIやロボット工学が急速に進歩している昨今、補綴医にとってこれほど刺激的な時代はないはずです。しかし、たとえどのような時代になってもアナログ的な思考や技術の必要性は決してなくならないと思います。私自身もデジタルには非常に興味を持ちつつも、日々の補綴治療では技術の研鑽と洞察力の向上を目指しています。

多様なニーズを持つ患者は確実に増加しており、多くの治療の選択肢を求められるようになりました。補綴診療のクオリティーをさらに向上させるために、学会としても臨床研究や基礎研究を力強く支援し、国民の健康増進やQOL向上に貢献できるよう努めたいと思っています。そして多くの先生方が楽しみながら日々の補綴治療に専念できることを願っています。

（理事長 大久保力廣）

補綴のアイデンティティとは

- 接着、インプラント、再生、デジタルといった医療技術の大きな革新
- 補綴は飛躍的に進化、発展し、多様性を増してきた。
- その結果、補綴のアイデンティティが理解しにくくなってきた

日本口腔インプラント学会
日本接着歯科学会
日本デジタル歯科学会

日本磁気歯科学会
日本義歯ケア学会 他

補綴

日本補綴歯科学会誌 特別企画 座談会 公益社団法人日本補綴歯科学会のこれまでの10年間を振り返り
補綴のアイデンティティと将来像を語る 日補綴会誌 2018;10:271-289.



- 数多くの研究結果から、健康寿命の延伸やQOL向上に「補綴」の重要性が実証されてきており、国民から私たち補綴医の躍動が強く求められる時代となりました。

- 今こそ、日本補綴歯科学会は魅力溢れる学術団体へと会勢拡大するためにも、全学会員が自信と誇りを持って、「補綴の力」を結集するべきだと思います。



第7回 JPS SCSC (Student Clinical Skills Competition) 開催報告

日本補綴歯科学会が主催する学生技能コンペティション「JPS SCSC」が今年も開催されました。全国の歯科大・歯学部からそれぞれ1名の学生がエントリーし、今回の課題（下顎第1大臼歯のハイブリッドレジンCAD/CAM冠支台歯形成）について審査が行われました。27大学が参加した一次審査で上位6名を選出し、2025年6月1日に二次審査会をGCコーポレートセンター（東京）にて開催しました。前日に開かれた情報交換会では、6名の学生はライバルであると同時に目標に向かって共闘する仲間となり、コンペティション当日には実技前に6人で円陣を組んで士気を高めていた姿が印象的でした。澤瀬学術委員長の合図で実技がスタートし、学生たちはこれまで練習してきた全力を左下6に注ぎました。

審査は完全ブラインド方式で学術委員会と教育問題検討委員会の委員からなる6名の審査員が行い、集計して順位を決定しました。第7回では広報委員会上田委員長のご尽力により、文部科学省の後援を受けられることとなりました。2019年より始まった本企画を第7回まで続けてきてくださった多くの方々のご尽力の成果でもあります。

審査が行われている間、学生は窪木理事長の講演を受講後、GCコーポレートセンター様のご厚意により、ショールームと館内に設置されたteamLabのアート

作品鑑賞ツアーに参加させていただきました。株式会社ジーシー様には、会場や器材のご準備から当日の運営までご協力いただきましたことを、この場を借りて深く御礼申し上げます。

第7回 JPS SCSC 二次審査の結果は以下の通りでした。

文部科学大臣賞： 青山古都美さん（長崎大）
日本補綴歯科学会理事長賞： 寺西進之丞さん（北海道大）
日本補綴歯科学会学術委員長賞： 石坂大昂さん（東歯大）
優秀賞（五十音順）： 笠井玲緒さん（徳島大）
孫 瑞雪さん（東北大）
中川結彩子さん（昭和医大）

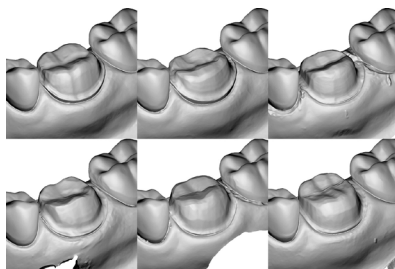
6名の作品はいずれも臨床的に通用するどころか、大変美しく運営に携わった我々も舌を巻くすばらしい出来でした。学生の向上心と教育に当たられた先生方のご指導の賜物であり、本企画への参加が今後のご活躍への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、協賛くださったストロマン・ジャパン株式会社、医歯薬出版株式会社、和田精密歯研株式会社、京セラ株式会社（順不同）に深く感謝申し上げます。

（SCSC 担当 右藤友督）



30分一発勝負の形成実技



6名が形成した支台歯（スキャンデータ）



表彰式

令和7年度公益社団法人日本補綴歯科学会定時総会，臨時総会

令和7年度公益社団法人日本補綴歯科学会臨時総会は2025年5月16日（金）に出島メッセにて対面形式で、令和7年度公益社団法人日本補綴歯科学会定時総会は2025年6月14日（土）にWeb出席形式で執り行われました。公益社団法人として「令和6年度計算書類（貸借対照表および正味財産増減計算書）および財産目録承認の件」を6月末までに総会にて承認する必要がある、資料準備等の都合上、本年度は昨年度に引き続き年2回の総会を開催する形とさせていただきます。

臨時総会では議長は東京歯科大学の山下秀一郎先生が務め、司会は総務が担当する形にて進行させていただきました。窪木拓男理事長からのご挨拶の後に、決議事項として定款の変更に関する件、名誉会員推薦に関する件、2年以上会費未納に伴う会員の除名の件についてお諮りさせていただき、承認多数で可決されました。報告事項として、総務より令和7年度事業計画および令和6年度事業報告を、各委員長より令和6年度および令和7年度4-5月期における所掌委員会の活動報告がされました。臨時総会終了後、規程に基づき、第134回学術大会大会長への感謝状贈呈、新規名誉会員への名誉会員称号記の贈呈、学会特別功労賞の贈呈、学術賞の表彰、学会論文賞、奨励論文賞、JPR Best Paper Award Original Article 部門、JPR

Best Paper Award Review Article 部門の表彰が執り行われました。

定時総会では議長は神奈川歯科大学の木本克彦先生が務め、司会は総務が担当する形にて進行させていただきました。大久保力廣副理事長による開会の辞、窪木拓男理事長からのご挨拶の後に、報告事項として、令和6年度事業報告を総務より報告し、決議事項として令和6年度計算書類（貸借対照表および正味財産増減計算書）および財産目録承認の件、理事選任に関する件、監事選任に関する件についてお諮りさせていただき、承認多数で可決されました。閉会の辞では二川浩樹副理事長より、窪木拓男理事長の2年間にわたる学会運営を称える挨拶がなされ定時総会は閉会となり、窪木拓男理事長の任期が終了となりました。

なお、定時総会終了後に開催されました令和7年度第2回臨時理事会において、理事長、副理事長、常務理事、委員長、委員、幹事の選定が決議され、大久保力廣新理事長による新たな運営が始まる一日となりました。

最後に、議長として円滑に議事を進めていただきました山下秀一郎先生、木本克彦先生、ご出席いただきました社員の皆様、本学会会員の皆様にご協力いただき、深く御礼申し上げます。

（総務担当 小見山 道）



臨時総会（会場風景）



定時総会（左：理事長，右：次期理事長）



臨時総会（集合写真）

渉外委員会報告

日本補綴歯科学会会員のみなさま、こんにちは。渉外委員の濱 洋平です。近年の本学会学術大会では、英語での企画やプログラムが非常に充実しています。本年、長崎で開催された大会でも、以下のように多くの英語セッションが実施されました。「英語のプログラムだと少し足が遠のく…」という方もいらっしゃるかと思いますので、内容を簡単にご紹介させていただきます。

国際シンポジウム Nakao Foundation 創設 5 周年企画「補綴の未来、歯科の未来。」

Sreenivas Koka 先生 (Executive Leadership Enterprises), Frauke Müller 先生 (University of Geneva), 江草 宏先生 (東北大) をお招きし、超高齢社会における補綴歯科の未来を拓くをテーマについてご講演いただきました。

日中韓 3 か国補綴歯科学会・セミナー「Cutting edge of contemporary prosthodontic research」

日本からは課題口演優秀賞を受賞された阿部真澄先生 (東北大), 岡田佳恵先生 (大阪大), 中国から Hao

Yu 先生 (Fujian Medical University), 韓国から Ji-Man Park 先生 (Seoul National University) がご登壇され、新進気鋭の研究を紹介しました。来年度は韓国にて、3 か国学術大会が開催予定です。

PCSP 特別講演「Occlusion, TMD, orofacial pain: An evidence-based overview & update with recommendations」

Pacific Coast Society for Prosthodontics (PCSP) から、前理事長 Michael John Racich 先生をお招きし、咬合・顎関節・口腔顔面痛に関する最新の知見と提言をお話いただきました。

これらの企画に加え、Oral Presentation (International) として 3 つの一般口演セッションも行われました。会員であればどなたでも抄録登録が可能であり、今後も多くの日本人研究者や留学生の参加が期待されます。来年度以降も、国際セッションは継続・発展していく予定です。ご意見・ご要望があれば、ぜひ渉外委員会までお寄せください。

(渉外委員会 濱 洋平)



国際シンポジウム



PCSP 特別講演

第134回学術大会報告

2025年5月16日（金）から18日（日）の3日間、出島メッセ長崎にて、公益社団法人日本補綴歯科学会第134回学術大会を開催致しました。本学術大会のテーマは、“補綴の未来、歯科の未来。「不易流行（変わらないもの、変えていくもの）」”です。まず本学術大会の開催にあたり、多くの企業・法人の皆様よりご協賛を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。また、大会の運営にご尽力いただきました株式会社キョードープラス、株式会社アトラス、ならびにながさきMICE（出島メッセ長崎）の関係者の皆様にも、深く感謝申し上げます。

今回は学術大会開催前に江草 宏先生がホストを務められたFLiP14（Future Leaders in Prosthodontics 14）が開催され、これにご参加された海外の先生方にも本大会へご参集いただきました。初日となる5月16日には、総会、日本歯科専門医機構認定共通研修、イブニングセッション等が行われ、その後ヒルトン長崎にて意見交換会が開催されました。大会長 村田比呂司、本学会理事長 窪木拓男先生のご挨拶に続き、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科長 川上 純先生、国際補綴歯科学会元会長 Sreenivas Koka 先生よりご祝辞を賜りました。さらに韓国補綴歯科学会会長 Jai-Young Koak 先生、日本顎咬合学会理事長 貞光謙一郎先生、本学会名誉会員の先生方など、多くのご来賓にご臨席いただきました。ご来賓ご紹介の後には、本学会元理事長であり、現・公立大学法人宮城大学学長の佐々木啓一先生より乾杯のご発声を頂戴しました。意見交換会には、ご来賓のほか、シンポジストの先生方、企業・法人の皆様、そして会員の先生方など約300名にご参加いただき、和やかな雰囲気

中、懇親を深められたものと思います。

17日、18日には澤瀬 隆先生を委員長とする学術委員会を中心に企画された特別講演、シンポジウム、臨床リレーセッションなど、充実したプログラムが展開されました。今回、本学会と連携協定を締結した日本顎咬合学会と専門医研修会を兼ねた合同シンポジウムも開催されました。企業のご協力のもと、ランチョンセミナーも実施され、会員の皆様による口演、ポスター発表も多数行われ、補綴歯科学の発展に大きく寄与する内容となりました。現理事長 大久保力廣先生には、「補綴の力」と題して次期理事長講演を行っていただき、今後の日本補綴歯科学会を力強く牽引されるご意志を感じることができました。

今回の学術大会には、Web参加を含めて2,664名の方にご登録いただきました。補綴歯科学の最先端の研究やその動向、補綴の基本となる臨床術式および先進的な治療術式の習得、そして補綴歯科学の未来について、多くの学びを得られる学術大会であったと自負しております。

閉会式では、次期大会長である愛知学院大学歯学部 武部 純先生より、第135回学術大会のご案内がありました。次回は2026年6月19日（金）から21日（日）に、ウィンクあいち（愛知県産業労働センター）にて開催予定です。ぜひ多くの皆様のご参加をお願いいたします。

最後に、この歴史ある和華蘭文化の町・長崎にて本学術大会を開催し、盛会のうちに終えることができましたことを、改めて皆様に深く御礼申し上げます。今後とも日本補綴歯科学会のさらなる発展を心より祈念いたします。（村田比呂司、原田佳枝）



窪木先生、大久保先生、澤瀬先生、大会校スタッフ集合写真



大久保先生に村田大会長より感謝状

●第134回学術大会における令和7年度認定医・専門医筆記試験

令和7年度認定医・専門医筆記試験は、昨年に引き続き対面での実施となりました。2025年5月16日(金)の14時30分～15時20分まで第134回学術大会の会場である出島メッセ長崎の第一会場に166名の受験者が集まりました。昨年の幕張メッセでの開催に対し、今年は地方での開催でしたが受験者は予想に反して多く、認定医や専門医に対する志の高さを象徴していると実感しました。多くの受験者に対し試験を行うことは、修練医・認定医・専門医制度委員会(以下、制度委員会)としても、とても緊張感のあるものでした。大会校および制度委員会メンバーのご尽力で会場設営から受付、試験監督までスムーズに行うことができましたことを心より感謝申し上げます。なお、合格基準(正答率60%以上)を満たした128名を合格とし(合格率77.1%)、最高および最低得点率はそれぞれ89%と30%でした。

試験実施にあたり制度委員会で行っている活動についてご紹介させていただきます。今年の試験は5月と例年より早めの学術大会でしたので、10月末を締め

切りとして、試験問題を各支部選出の代議員の先生方に提出いただきました。今回は、61名の代議員から183問題を提出いただきました。昨年度より試験範囲をこれまでの旧領域から新領域へと変更し、集まった問題を7領域のカテゴリーごとに分類します。その問題を制度委員会の先生方に依頼して、一次ブラッシュアップを行いました。その後、別の担当委員および幹事が二次ブラッシュアップを行い、出題候補問題を抽出していき、最終的に50問の試験問題が完成しました。このような過程を経ることで、認定医・専門医を目指す方の基礎的知識を適切に評価する問題作成につながると考えております。

令和8年度は2026年6月19日(金)～21日(日)にウインクあいち(愛知県)にて学術大会が行われます。本年と同様に認定医・専門医筆記試験を対面で行う予定です。認定医・専門医を目指しておられる先生方はぜひご受験ください。今後も補綴歯科学会の認定医・専門医制度の充実に会員の皆さまのご理解とお力添えをいただきますようお願い申し上げます。

(修練医・認定医・専門医制度委員長 鮎川保則)



筆記試験



筆記試験監督(制度委員会)

●第134回学術大会における令和7年度専門医研修会報告

第134回学術大会は村田比呂司・長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 歯科補綴学分野教授を大会長として2025年5月16日（金）～18日（日）の日程で長崎県・出島メッセ長崎にて開催されました。この会期中、5月17日に日本顎咬合学会・日本補綴歯科学会合同シンポジウムとして「咬合挙上を再考する」、5月18日に「欠損歯列の診断 何を診て何を考えるのか？」の2件の専門医研修会を実施しました。

「咬合挙上を再考する」では、馬場一美先生（昭和医大）、貞光謙一郎先生（関西支部、日本顎咬合学会理事長）を座長に窪木拓男先生（岡山大）、山下秀一郎先生（東歯大）および渡辺隆史先生（日本顎咬合学会）を講師としてセッションを行いました。このセッションでは、咬合挙上後の予後不良症例においては咬合高径の評価・要否の判断（診断）・方法、咬合挙上後の補綴処置に問題がある場合が多いことについて、顎関節症治療、有床義歯治療、咬合再構成の観点から咬合挙上に関する最新の知見をお話いただきました。

「欠損歯列の診断 何を診て何を考えるのか？」では小峰太先生（日本大）、松浦尚志先生（福歯大）を座長に、荻野洋一郎先生（九州大）、三浦賞子先生（明海大）および水橋 史先生（日歯大新潟）を講師とし

てセッションを行いました。このセッションでは、欠損歯列の診断を行ううえでは単に欠損歯数や残存歯の状態だけでなく患者固有の背景までも組み入れたうえでどのような治療計画を立てるかについて専門医審査委員の先生方からご講演いただき、欠損歯列の診断と治療計画について再考する良い機会となりました。

日本歯科専門医機構による補綴歯科専門医制度の認証に伴い、生涯学習の重要性はますます高まっています。補綴歯科専門医として持つべき補綴領域の知識や技能は専門医研修会から、補綴に限らずすべての専門医が共通して身につけておくべき知識や技能は共通研修を通して習得することとなっており、本第134回学術大会でも2単位分（計120分）の共通研修（院内感染対策および患者・医療者関係の構築）を実施しました。一度の学術大会へのご参加で共通研修2単位と専門医研修4単位が取得できますので、今後も学術大会でのこれらの研修会のご参加をお待ちしております。また、オンラインでの専門医研修会、共通研修も別途準備しておりますので、学術大会に参加できなかった先生も生涯学習の場としてオンライン共通研修・専門医研修会へのご参加をお待ちしております。

（修練医・認定医・専門医制度委員長 鮎川保則）



専門医研修会



質疑応答



共通研修

●シンポジウム開催報告

●特別シンポジウム

「新たな時代に対応した無歯顎補綴臨床の展開」

座長：村田比呂司（長崎大）

シンポジスト：杉田龍士郎（東関東支部 / 科学大）

松田 謙一（関西支部 / 大阪大）

中居 伸行（関西支部 / 長崎大）

高度に顎堤が吸収した症例の増加や義歯装着者の高齢化に伴う順応性の低下等により、無歯顎補綴は従来に比べ難症例化し、そのため従来の概念では対応できないのが現状です。本シンポジウムでは、無歯顎患者の解剖学的評価を含む診断、通常の全部床義歯による難症例への考え方と臨床手技、インプラントを用いた無歯顎補綴について、超高齢社会を背景とした新しい概念を交えて解説いただきました。会場は立ち見ができるほどの盛況ぶりで、多くの先生方に聴講いただき、会員の皆様の関心の高さを改めて実感しました。先生方の臨床に有益な内容であったと確信しております。

（村田比呂司）



左から、松田先生、杉田先生、中居先生、村田先生



シンポジウム時の会場の様子

●メインシンポジウム

「咬合挙上を再考する」

座長：馬場 一美（昭和医大）

貞光謙一郎（関西支部、日本顎咬合学会理事長）

シンポジスト：窪木 拓男（岡山大）

山下秀一郎（東歯大）

渡辺 隆史（日本顎咬合学会）

このたび、日本補綴歯科学会学術大会に参加させていただきました。大会の開催にご尽力された関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。また、日本顎咬合学会との連携協定調印式という貴重な式典も開催いただき、重ねて御礼申し上げます。

その後に行われたメインシンポジウム「咬合挙上を再考する」では、座長を務めさせていただきながらも馬場先生にお任せをし、大変興味深く拝聴いたしました。

窪木先生による顎関節に関するご講演は、臨床家として非常に示唆に富む内容であり、難症例に対する安易な対応の危険性を改めて実感いたしました。また、山下先生のご講演は非常に分かりやすく、セントリックの認識について深く理解する機会となりました。

さらに、日本顎咬合学会からは渡辺先生にご登壇いただき、ナソロジーの流れを背景にした日本顎咬合学会の治療の特徴と、独自の視点からの咬合挙上に関するご講演を頂戴しました。もう少しディスカッションの時間があれば、より多くの意見交換ができたのではないかと感じております。

このような貴重な機会をいただけたことに、心より感謝申し上げます。

（貞光謙一郎）



集合写真（左から馬場先生、山下先生、渡辺先生、窪木先生、貞光先生）



メインシンポジウム会場風景

●シンポジウム 1

「咀嚼機構の進化とロボットシミュレーション」

座長：小川 匠（鶴見大）

築山能大（九州大）

シンポジスト：遠藤秀紀（東京大学総合研究博物館）

東森 充（大阪大学大学院工学研究科）

進化学とロボティクスの視点から咀嚼機能を多角的に掘り下げるシンポジウムを開催いたしました。遠藤秀紀先生には、脊椎動物における顎関節の進化過程や咀嚼との関連、アリクイに代表される咀嚼の多様性についてご講演いただきました。東森 充先生からは、食塊形成に着目した新たな咀嚼シミュレータの開発とその介護用食品評価や病態理解への応用についてご紹介いただきました。専門領域の異なる演者による構成であったため、講演の順序や内容の調整には工夫を要しましたが、補綴学に新たな視座と学際的な刺激をもたらす貴重な機会となり、参加者からも多くの関心が寄せられました。

(小川 匠，築山能大)



遠藤秀紀先生



東森 充先生

●シンポジウム 2

「無歯顎補綴におけるデジタルワークフロー」

座長：正木千尋（九歯大）

田中晋平（昭和医大）

シンポジスト：上田貴之（東歯大）

金澤 学（科学大）

植松厚夫（東京支部）

本セッションでは、無歯顎補綴のデジタル化に取り組む3名の先生にご講演いただきました。上田先生は、総義歯製作の各段階におけるデジタル／アナログの選択と、ICTを活用した訪問診療の展開を示されました。金澤先生は、IODの診査・診断から製作までを概説し、ミルドデンチャーや3Dプリントデンチャーの応用を解説されました。植松先生は、治療ゴール設定から補綴主導型サージカルガイド製作に至る固定性インプラント治療のワークフローを提示されました。朝一番にもかかわらず立ち見が出る盛況で、大変有意義なセッションとなりました。

(正木千尋，田中晋平)



左から正木先生，金澤先生，植松先生，上田先生，田中先生



仕掛人の山下秀一郎教授とともに（左から山下先生、遠藤先生、東森先生、小川先生、築山先生）

●シンポジウム 3

「補綴歯科治療の未来へ向けた体性幹細胞の応用展開」

座長：西村正宏（大阪大）

山田将博（東北大）

シンポジスト：松下 祐樹（長崎大）

秋山謙太郎（岡山大）

新部 邦透（東北大）

このたび第 134 回学術大会において、シンポジウム 3「補綴歯科治療の未来へ向けた体性幹細胞の応用展開」の座長を務めさせていただきました。長崎大学・松下先生、岡山大学・秋山先生、東北大学・新部先生より、体性幹細胞研究の基礎から補綴歯科治療への応用可能性まで、最先端の研究内容をご講演いただきました。翌日のテキサス大学・小野先生の海外特別講演とも呼応し、参加者にとって大変有意義な機会になったと思います。限られた時間で活発な議論を進めるにあたり論点整理に留意し、多くの方々のご協力により臨床家・研究者が集う充実したシンポジウムとなりました。本シンポジウムが今後の補綴歯科治療の発展に寄与することを期待しています。

（西村正宏，山田将博）



パネルディスカッションの様子



左から山田先生，新部先生，秋山先生，松下先生，西村先生

●シンポジウム 4

「国際的なキャリアパス形成」

座長：島田明子（大歯大）

依田信裕（東北大）

シンポジスト：末永 華子（シドニー大）

多田紗弥夏（シンガポール大）

木戸 淳太（九州支部）

本学会の多様性を示し、次世代を担う若手会員のキャリアパス形成構想に寄与するために企画した本シンポジウムでは、バックグラウンド、居住国、そして勤務医療機関の異なる 3 名の先生方がご登壇されました。パイオニアとして歩んできた道のりについての三者三様のストーリーの中に、『あなたにもできる』という共通の強いメッセージが込められていました。20 分間の総合討論では、若手からベテラン、大学院生から開業医という多様性のある先生方からの質問が続き、演者と聴衆双方からの熱い思いで会場が満たされた 90 分間でした。

（島田明子，依田信裕）



総合討論



左から依田先生，木戸先生，多田先生，末永先生，島田先生

●シンポジウム5

「審美歯科治療における長期安定性獲得の要件」

座長：新谷明一（日歯大）

尾立哲郎（長崎大）

シンポジスト：日高豊彦（西関東支部）

構 義徳（東京支部）

中野 環（大阪大）

本シンポジウムでは「審美歯科治療における長期安定性獲得の要件」と題して、臨床経験豊富な3名の先生方にご登壇いただき、構先生からは力のコントロールの重要性について、中野先生からは臨床研究をベースとしたインプラント周囲の審美性獲得の要件について、そして日高先生からは20年以上の長期経過をもとにした考察についてご講演いただきました。シンポジストの先生方は講演についても経験豊富であり、「審美歯科治療」の“長期安定性”という難しいテーマではありましたが、発表内容打ち合わせから当日の講演までスムーズに行うことができました。

（新谷明一、尾立哲郎）



質疑応答



シンポジストの先生方（左から構先生、中野先生、日高先生）

●シンポジウム6

「8020 達成者の臨床像～多歯超高齢社会を見据えた補綴臨床～」

座長：梅原一浩（東北・北海道支部）

池邊一典（大阪大）

シンポジスト：鷹岡竜一（東京支部）

齊藤秋人（東京支部）

鮎川保則（九州大）

本シンポジウムでは、8020 達成者の現在の臨床像と課題についてご講演いただきました。現在の8020の達成者は、デンタルIQが高く、メインテナンスの重要性を理解しており、咬合支持が維持されると健康寿命の延長につながっていることがわかりました。一方で、高齢者の終末像が要介護であることは否定できず、今後は「次の一手」として、ネットワーク作り、咬合支持の回復、介護者とのコミュニケーションを構築させる必要があることが討論されました。会場には本テーマに興味あるたくさんの先生方に参加していただき、有意義なシンポジウムとなりました。

（梅原一浩、池邊一典）



シンポジウム終了後の記念撮影（左から池邊先生、鷹岡先生、鮎川先生、齊藤先生、梅原先生）

●シンポジウム 7

「医科歯科連携における歯科衛生士、補綴歯科専門医の重要性」

座長：笛木賢治（科学大）

二川浩樹（広島大）

シンポジスト：草島 邦夫（藤田医大）

藤井 重子（医療法人白水会白川病院）

合掌かおり（東海支部）

三輪 俊太（東海支部）

本シンポジウムは日本歯科衛生士会との初の合同開催として企画され、医師・歯科衛生士・補綴歯科専門医が登壇し、医科歯科連携の実際と課題を共有しました。歯科医師・歯科衛生士の活動の場は「医療」の現場へと拡張しつつあります。歯科職種の中でも役割が分かれ、それぞれの専門性を生かすためには、連携が欠かせません。異なる立場の職種がどう役割を担い、高齢者の「噛む」「食べる」機能を支えるか、その流れをどう示すかに苦慮しましたが、登壇者間の課題意識は自然に共有され、連携の本質が伝わるセッションとなりました。

（三輪俊太，笛木賢治，二川浩樹）



医科歯科連携の現場から語る連携のかたち



医科歯科の境界を越える活発な質疑応答

●シンポジウム 8

「歯科と栄養の出会いとこれから」

座長：古屋純一（昭和医大）

石井良昌（日本栄養治療学会）

シンポジスト：菊谷 武（日歯大）

光永 幸代（日本栄養治療学会）

嶋津小百合（日本栄養治療学会）

第134回大会では、前回大会で開催されたキックオフシンポジウムにつづき、日本栄養治療学会（JSPEN）との合同シンポジウムが開催されました。「歯科と栄養の出会いとこれから」をテーマに、日本歯科大学の菊谷 武先生、横浜市立大学の光永幸代先生、そして管理栄養士である嶋津小百合先生にご登壇いただきました。口腔は消化管の入り口であるにも関わらず、近いようで遠い歯科と栄養が、これからどのように連携を深化させていくかについて、会場の皆さんとも熱い議論が交わされました。ご参加ありがとうございました。

（古屋純一，石井良昌）



総合討論の様子（左から島津先生，光永先生，菊谷先生）



シンポジウム終了後の記念撮影（左から古屋先生，島津先生，光永先生，菊谷先生，石井先生）

●シンポジウム 9

「口腔の痛みを見極めるために（補綴歯科治療に必要な慢性疼痛の基礎知識）」

座長：小見山 道（日大松戸）

松香 芳三（徳島大）

シンポジスト：篠田 雅路（日本大）

白田 頌（慶應大）

大久保昌和（日大松戸）

補綴歯科治療において、難治性の疼痛を有する患者に遭遇し、臨床で対応せざるを得ない場合がある。そこで昨今の疼痛学の発展に伴う、神経科学に基づいた疼痛学の知識を共有し、その対応を学ぶことの意義は大きい。今回、基礎歯科医学の立場からの内容を日本大学歯学部篠田雅路先生、最も臨床で遭遇する二次性の慢性疼痛の内容を慶應義塾大学医学部の白田 頌先生、慢性疼痛の定義や臨床での対応について日本大学松戸歯学部の大久保昌和先生に解説いただき、有意義なディスカッションが行われた。理解が難しい内容を、わかりやすく解説いただくことに苦労したが、参加者も多く、良い感想もいただいた。補綴歯科治療に必要な慢性疼痛患者の対応に少しでも貢献できたなら幸甚である。

（小見山 道，松香芳三）



総合ディスカッション時の3名の講師



無事に終了して安堵する関係者（左から、小見山先生、大久保先生、白田先生、篠田先生、松香先生）

●シンポジウム 10

「IRPD —インプラントの併用は部分床義歯治療のゲームチェンジャーになるのか?—」

座長：大久保力廣（鶴見大）

兒玉 直紀（岡山大）

シンポジスト：黒嶋伸一郎（北海道大）

奥野 幾久（関西支部）

佐藤 洋平（西関東支部／鶴見大）

本シンポジウムでは、部分床義歯（RPD）の難症例への治療法の一つとしてのインプラントパーシャルデンチャー（以下、IRPD）を取り上げました。黒嶋先生には数多くの臨床エビデンスを収集したうえでのIRPDの科学的現在地、奥野先生には長期経過からみたIRPDの症例選択の基準や設計のポイント、佐藤先生にはRPDの挙動からみた回転変位抑制のためのIRPDの有効活用法についてご講演いただきました。質疑応答の時間を十分に設けることができなかったことは反省点ではありますが、早朝のセッションにもかかわらず立ち見が出るほど盛況なシンポジウムでした。

（大久保力廣，兒玉直紀）



総合討論の様子（左から、佐藤先生、奥野先生、黒嶋先生、兒玉（座長）、大久保（座長）

市民フォーラム「知って得する入れ歯の話」開催報告

2025 年 5 月 18 日 (日)、日本補綴歯科学会第 134 回学術大会において、愛知学院大学歯学部 高齢者住宅・在宅歯科医療学講座の木本 統先生を講師にお招きし、市民フォーラム「知って得する入れ歯の話」が開催されました。当日は 90 名を超える市民の方が参加され、義歯に関する歴史や製作方法から日常生活での管理やメンテナンス方法に至るまで、幅広い学びを提供する時間となりました。まず、木床義歯の歴史や日本における義歯の普及の経緯についての紹介がありました。古くはつげの木や蠟石、動物の骨などで作られた義歯が、明治時代にはゴム義歯として改良され、現在では高性能な樹脂や金属床を活用した義歯へと進化していることが紹介されました。

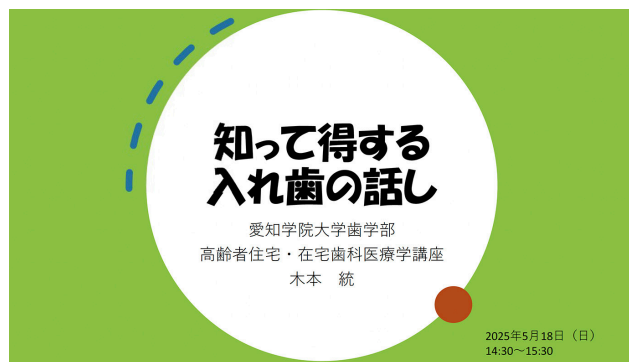
続いて、義歯の製作ステップや咬合調整方法、義歯装着者が増加する年齢層の傾向について解説がありました。また、義歯装着に伴う口腔内環境の変化についても詳しく解説され、義歯清掃の重要性と具体的な方法が示されました。義歯は免疫の防御機構が働かないため、義歯表面にバイオフィルムが形成されやすく、誤嚥性肺炎など全身的なリスクにもつながることが強調されました。義歯清掃では機械的なブラッシングに

加え、義歯洗浄剤の併用が有効であり、特に超音波洗浄の有効性など、科学的なデータに基づく情報が提供されました。さらに、義歯の就寝時装着の可否や、顎堤の保護、義歯の適切な保管方法、あるいは義歯で食べやすい食品など、日々の疑問に応える形で情報提供がなされました。特に、夜間の義歯装着が睡眠の質には影響しないものの、誤嚥性肺炎のリスクが高まることも示され、義歯を清潔にする重要性について強調されました。また、義歯を装着していることで、認知症の発症リスクが軽減されるという研究結果の紹介もあり、義歯の役割が「単なる食事の道具」ではなく、全身の健康維持や生活の質の向上に寄与することを再認識させられる内容でした。最後に、義歯安定剤についての注意点や、義歯に関する困りごとがあれば補綴歯科専門医へ相談するようにとのメッセージが伝えられました。また、終了後には参加者からの活発な質問も見受けられ、本フォーラムが、市民の皆さまが義歯治療に対する理解を深める一助となったことが感じられました。

(関西支部 松田謙一)



会場風景



講演タイトル

令和 6 年度学会優秀論文賞, 第 134 回学術大会優秀賞 受賞者の声

令和 6 年度 優秀論文賞



権田知也 (大阪大)

Effects of denture use on occlusal force on abutment teeth in molar distal-extension edentulism

J Prosthodont Res 2024

doi: 10.2186/jpr.JPR_D_23_00144

この度は令和 6 年度優秀論文賞 (学会論文賞) を賜り、大変光栄に存じます。査読や選考に携わったすべての方々に、厚く御礼申し上げます。

臼歯部遊離端義歯では支台歯の歯周状態が悪化することが認められ、義歯の動揺や支台歯の清掃状態とともに、支台歯に加わる咬合力の影響も考えられます。しかし、これまで遊離端義歯の支台歯の咬合力について検討した研究はみられません。本研究では遊離端欠損患者 55 名において、部分床義歯を装着した場合と装着しない場合の支台歯に加わる咬合力を計測し、支台歯に加わる咬合力負担について検討しました。部分床義歯装着時と非装着時の支台歯および全歯列への咬合力を咬合力測定シートを用いて計測しました。その結果、部分床義歯装着時の総咬合は非装着時よりも大きくなり、部分床義歯非装着時の支台歯の咬合力は装着時よりも大きくなりました。さらに支台歯の咬合力は、非支台歯の咬合力よりも大きくなりました。以上のことから、義歯非装着時の咬合力は非支台歯よりも支台歯で大きいですが、部分床義歯を装着することで支台歯の咬合力を軽減できる可能性が示されました。この結果から、義歯装着により支台歯に加わる咬合力が減少することが示され、欠損拡大の防止につながる可能性が示唆され、また遊離端義歯による補綴歯科治療の臨床的意義を明らかにすることができました。

最後に、本研究の遂行に際し多大なるご指導ご鞭撻賜りました有床義歯補綴学・高齢者歯科学講座の池邊一典教授をはじめ、多大なる御助言や御協力を賜りました諸先生方に心より感謝申し上げます。



後藤崇晴 (徳島大)

Social frailty as a predictor of all-cause mortality and functional disability: a systematic review and meta-analysis

Sci Rep 2024; 14: 3410.

この度は、令和 6 年度公益社団法人日本補綴歯科学会優秀論文賞 (学会論文賞) を賜り、大変光栄に存じます。

フレイルには身体的フレイル、精神・心理的フレイル、そして社会的フレイルといった三つの側面があります。本研究では、社会活動への参加の減少や外出頻度の低下といった社会的フレイルが死亡率や機能障害の発生に与える影響について、システマティックレビューとメタアナリシスを行いました。その結果、社会的フレイルが死亡率、機能障害の発生のリスクを有意に高めることが明らかとなりました。これは高齢者の健康維持・増進には、従来の医学的・生物学的側面のみならず、地域社会とのつながりや孤立防止といった社会的要因も極めて重要であることを示しています。社会的フレイルという研究テーマに関しては、歯科医師が取り組む領域から少し距離があるように思われるかもしれませんが、口腔顎顔面の形態と機能の維持・再建を担い、高齢者の QOL に大きな影響を与える立場にある補綴歯科医が、社会的要因を含めた研究を発表することには大きな意義があると考えております。今後も社会福祉学的な視点を持ちながら、国民の QOL 向上と幸福追求に資する研究・臨床に励んで参ります。

最後になりましたが、本研究の遂行において数々の御助言、御指導をいただきました本学地域医療福祉学分野、白山靖彦教授、木屋平診療所所長、藤原真治先生、本学口腔顎顔面補綴学分野の先生方に心より感謝申し上げます。



令和 6 年度 奨励論文賞



小野喜樹 (新潟大)

Wnt/ β -catenin Promotes Cementum Apposition in Periodontal Regeneration
J Dent Res 2025; 104(2): 183-192.

このたび、令和 6 年度公益社団法人日本補綴歯科学会奨励論文賞を賜りましたことを、大変光栄に存じます。

歯周組織は口腔機能において重要な役割を担いますが、いまだ予知性の高い再生方法は確立されていません。その要因の一つとして、歯周組織再生に関わる細胞の分化制御メカニズムが十分に解明されていないことが挙げられます。本論文では、歯周組織の再生に寄与するシグナル伝達経路の解明を目的に、マウス臼歯の腎被膜下移植による歯周組織再生モデルを用い、再生過程における網羅的遺伝子発現解析を行いました。その結果、Wnt/ β -catenin シグナルの活性化が示唆されました。さらに誘導性に Wnt/ β -catenin シグナルを制御することが可能な遺伝子発現マウスを用いて解析を行った結果、セメント質の形成様相に変化が生じることを明らかにしました。今後は、歯根膜細胞における Wnt/ β -catenin シグナルの制御により、新たな歯周組織再生法の開発へと発展させていきたいと考えております。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたりご指導を賜りました本学の魚島勝美名誉教授、加来 賢准教授をはじめ、共著者の先生方、また多くの助言とご協力をいただきました諸先生方に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。



辻岡義崇 (大阪大)

Survival time analysis of remaining teeth following replacement of unilateral free-end missing teeth: A comparison between fixed implant-supported prostheses and removable partial dentures

Clin Oral Implants Res 2024; 35: 526-33.

この度は、日本補綴歯科学会令和 6 年度奨励論文賞に選出していただき、大変光栄に存じます。また、ご選考いただきました先生方、学会関係者の皆様方に厚く御礼申し上げます。

臼歯部遊離端欠損に対する補綴歯科治療では、主に、インプラントと、部分床義歯が用いられており、効果的かつ信頼性の高い補綴装置であることが、広く認知されています。これまでに、それぞれの治療後に生じる残存歯の喪失率については、多く報告されております。しかし、修復状態や歯周状態などの残存歯の状態を考慮して、これら治療法の違いが、治療後に生じる歯の欠損に与える影響を検討した報告はみられません。

そこで、本研究では、臼歯部片側遊離端欠損に対して、インプラントまたは部分床義歯による補綴歯科治療を受けた患者を対象に、すべての残存歯の生存率についての縦断調査を行い、さまざまな背景因子を考慮した分析を行うことで、臼歯部片側遊離端欠損に対する補綴歯科治療の違いが、欠損拡大に与える影響について検討することを目的としました。

その結果、インプラント群では、部分床義歯群と比較し、残存歯全体、さらに欠損補綴部に近接する歯、ならびに欠損補綴部と同顎反対側の残存歯において、喪失率が低いことが示されました。

今回の受賞を励みに、今後さらに詳細な検討を重ね、補綴歯科治療の進展に貢献できるよう努めてまいります。

最後になりますが、本研究に際し多大なるご指導を賜りました池邊一典教授、豆野智昭講師、和田誠大先生、ならびに多くの助言とご協力をいただいた諸先生方に心より感謝申し上げます。





萩野僚介 (大阪大)

Effect of filler contents on the bond strength of CAD/CAM resin crowns: New resin primer versus conventional silane agents
J Prosthodont Res 2024; 68(2): 283-289.

この度は、令和6年度公益社団法人日本補綴歯科学会奨励論文賞に選出いただき、大変光栄に存じます。受賞にあたり、査読・選考に携わっていただいた関係各位に、心より御礼申し上げます。

現在、CAD/CAM レジン冠に対して推奨されているシラン処理ですが、シランは化学的に不安定で、酸性環境下や水によって劣化することが報告されています。そのため、CAD/CAM レジン冠の長期接着性を低下させる一因と考えられます。そこで本研究ではブロック表面に露出したフィラーではなく、マトリックスレジンに接着対象とする MMA 含有プライマー処理の長期接着性を評価しました。従来のシラン処理と比較した結果、MMA 含有プライマー処理は明確な接着界面ではなく、プライマーとレジンセメントが混在した特徴的な 5-10 μ m の帯状層を形成し、高い長期接着性を示すことが明らかとなりました。これまで MMA 含有プライマーの長期接着性に関する報告は非常に少なく、今回の結果から適応症例の拡大を促し、歯科におけるメタルフリー治療の推進に貢献できる可能性があります。このたびの受賞を励みとし、今後は本研究の知見をさらに深く検討し、歯科補綴学の発展に寄与できるよう努めてまいりたいと存じます。

最後になりましたが、遂行にあたり御指導賜りました矢谷博文名誉教授、峯 篤史准教授、本研究を御推薦いただきました西村正宏教授、ならびに研究にご協力いただきました方々に心から厚く御礼申し上げます。



JPR Best Paper Award 2024 (Review article category)



近藤 威 (東北大)

江草 宏 (東北大)

西村一郎 (カリフォルニア大学ロサンゼルス校)

Current Perspectives of Residual Ridge Resorption: Pathological Activation of Oral Barrier Osteoclasts
J Prosthodont Res 2023; 67 (1): 12-22.



この度は、日本補綴歯科学会第134回学術大会において、JPR Best Paper Award 2024 (Review article category) を賜り、誠に光栄に存じます。選考いただきました先生方には心より感謝申し上げます。

「私の師である Douglas A. Atwood の研究を絶やしてはならない。顎堤吸収に関する最新の知見をまとめた論文を書こう。」本研究の始まりは、カリフォルニア大学ロサンゼルス校

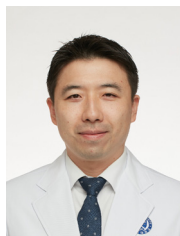
の西村一郎教授の一言でした。西村教授は、東北大学・江草 宏教授と私の共通の師でもあり、その提案に異論を唱えるはずもなく、私たちはすぐに論文作成に取りかかりました。故 Atwood 先生は、ハーバード大学において世界をリードされた補綴歯科医であり、顎堤吸収研究の先駆者です。我々は、Atwood 先生の研究を基盤に、最新の生物学的知見を集約し、顎堤吸収を骨免疫の観点から読み解く論文を作成しました。

本論文で我々は、口腔粘膜直下には特異的な破骨細胞が存在し、義歯装着などの機械的刺激が T 細胞を中心とする免疫細胞を活性化することで、口腔粘膜特異的破骨細胞を刺激し、顎堤吸収が生じる可能性を論じました。本研究成果が、更なる顎堤吸収の生物学的機序解明や新たな抑制技術開発に貢献することを期待しております。

「師の想いを受け継ぐ」ことはとても重要です。先人が築き上げてきた歴史を継承・発展させ、今後も歯科界の更なる発展に寄与したいと思います。

末筆ですが、本論文を作成するにあたり、多くのご指導を賜りました西村教授、江草教授をはじめ、ご協力いただきました先生方には心より感謝しております。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

JPR Best Paper Award 2024 (Original article category)



jongeun Kim
Na-Eun Nam
hwangbo na kyung



I am deeply honored and excited to receive the JPR Best Paper Award. Although it was a brief two-day trip, traveling to Japan to receive the award in person was truly meaningful and memorable. I thoroughly enjoyed Japan's beautiful scenery and delicious cuisine, but most importantly, meeting Professor Egusa, the Editor-in-Chief of JPR, in person was the most valuable and inspiring opportunity. The academic exchanges with other researchers allowed me to expand my scholarly network significantly, opening new possibilities for future collaborations and research partnerships.

What brought me the greatest joy was knowing that our research had been cited by many researchers, leading to this prestigious recognition. It was rewarding to have our work acknowledged, and I believe we received such attention thanks to JPR journal's recognition of our research's worth.

Our study, titled "Effects of surface glazing on the mechanical and biological properties of 3D printed permanent dental resin materials," focused on addressing the critical discoloration issues of 3D printed prosthetics that have limited their clinical applications. To overcome the limitations that prevent 3D printed prosthetics from being widely used due to discoloration problems, we systematically applied surface glaze treatment and validated its effectiveness. I hope that with continued advances in materials science and innovative post-processing techniques, 3D printing materials will become widely adopted for permanent prosthetic purposes, ultimately

improving patient outcomes and clinical practice.

This meaningful research became a starting point for ongoing academic exchanges with colleagues worldwide, allowing us to make valuable scientific contributions to the field. Our dedicated research team remains strongly committed to continuing our research efforts and contributing to the advancement of prosthodontics. I am profoundly grateful that outstanding international journals like JPR provide us with the prestigious platform to present our research findings and share knowledge with the global dental community.



第 134 回学術大会 課題口演賞



Lutfi Putra Perdana (徳島大)
Intra-Trigeminal Ganglionic rIL-10
Injection Relieves Orofacial Pain
via Potent β -Endorphin Release

Dear Members of the Japan Prosthodontic Society, I am deeply honored to receive this recognition for our research. This award is a meaningful milestone in my academic career and a strong encouragement to continue pursuing scientific contributions to prosthodontics. Managing trigeminal neuropathic pain (TNP) remains challenging, as most medications offer limited benefits and are commonly associated with adverse effects. TNP is a chronic pain resulting from damage or dysfunction of the trigeminal nerve, and twenty percent of patients who were prescribed first-choice drugs for TNP discontinued their treatment because of side effects, which the European Medicines Agency categorizes as very common. Recent studies have highlighted the critical role of cytokines in modulating pain pathways, offering new therapeutic targets for pain relief. Among these, interleukin-10 (IL-10) has emerged as a promising candidate due to its ability to promote an anti-inflammatory environment. IL-10 has been shown to exhibit potential as a therapeutic target in various pain models, including

TNP. We explore the mechanism by which IL-10 induce analgesic effect in TNP model, and I am honoured to present our findings in the 134th annual meeting of the Japan Prosthodontics Society.

I would like to express my gratitude to Professor Yoshizo Matsuka, whose guidance, encouragement, and mentorship have been invaluable throughout this research. I am also thankful to my co-authors, laboratory colleagues, and staff at the department of stomatognathic function and occlusal reconstruction, Tokushima University, all of whom provided support and inspiration. I will continue to work diligently to conduct research that bridges basic science and clinical application, and I sincerely hope that my work will contribute in some small way to the advancement of prosthodontics and to the well-being of patients in need.

◆ ◆ ◆ 小野喜樹 (新潟大)

細胞増殖活性に基づく新規歯根膜幹細胞の同定



このたび、日本補綴歯科学会第134回学術大会におきまして、課題口演賞を賜りましたことを大変光栄

に存じます。

歯根膜は歯と歯槽骨を結合し、口腔機能を支える重要な組織ですが、いまだ予知性の高い再生法は確立されていません。その要因の一つとして、歯根膜幹細胞の組織内局在や増殖・分化動態が十分に解明されていないことが挙げられます。従来、歯根膜幹細胞の局在解析には特定の遺伝子発現を示す細胞群を標識して長期追跡する方法が用いられてきましたが、この手法では組織全体の幹細胞動態を包括的に捉えることが困難でした。そこで本研究では、幹細胞分化と細胞増殖活性との相関に着目し、複数の細胞標識法を組み合わせることで組織内の増殖活性を横断的に解析することで、歯根膜幹細胞の組織内局在を探索しました。その結果、従来は主に骨近傍の血管周囲に局在すると考えられていた歯根膜幹細胞が、セメント質近傍にも存在することを示唆する結果を得ることができました。今後は、このセメント質近傍に局在する歯根膜幹細胞の特性を詳細に解析し、新規歯根膜幹細胞の同定へと発展させていきたいと考えております。

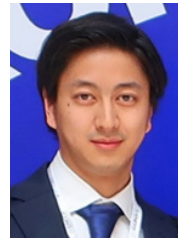
最後になりましたが、本研究の遂行にあたりご指導

を賜りました本学の加来 賢准教授をはじめ、共著者の先生方、また多くの助言とご協力をいただきました諸先生方にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。



◆ ◆ ◆ 高石宗佳 (大阪大)

レジンブロックの物性向上はCAD/CAM レジン冠の脱離を抑制する



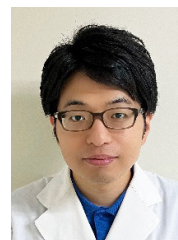
この度は、日本補綴歯科学会第134回学術大会におきまして、課題口演賞に選出いただき大変光栄に存じます。また、ご選考いただきました先生方、学会関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

CAD/CAM レジン冠は2014年に保険適用が開始されて以来、メタルフリー治療として広く臨床応用されていますが、他の補綴装置と比較して脱離の発生率が高いことが報告されています。そこで、本研究は、CAD/CAM レジン冠の脱離に影響を与える要因を明らかにすることを目的としました。小白歯に装着されたCAD/CAM レジン冠の臨床経過を後向きに調査し、レジンブロックの複数の物性項目を実際に測定しました。その結果、レジンブロックの物性（特に曲げ弾性率と吸水量）が冠脱離と有意に関係していることが示されました。今回の受賞を励みに、今後はこれらの知見に関してより詳細な検討を行うことで、CAD/CAM レジン冠治療の臨床成績向上に寄与する研究を継続してまいります。最後になりましたが、本研究に際して多大なるご指導を賜りました西村正宏教授、峯 篤史准教授ならびに、研究遂行にあたり数多くの助言やご協力をいただきました諸先生方に、この場をお借りして感謝申し上げます。



◆ ◆ ◆ 谷脇竜弥 (徳島大)

睡眠時の血糖値が睡眠時ブラキシズムに与える影響の検討



この度は、公益社団法人日本補綴歯科学会第134回学術大会において課題口演賞を賜り、誠にありがとうございました。

睡眠時ブラキシズム (SB) は睡眠中の咀嚼筋活動であり、そのバイオマーカーとして律動性咀嚼筋活動 (RMMA) が用いられています。RMMA の発現に

先立ち交感神経活動が亢進されることが報告されており、睡眠中の血糖値低下時にも交感神経活性が上昇することが知られています。本研究では、睡眠中の血糖値と RMMA の発現との関係を明らかにすることを目的としました。SB の自覚や指摘を受けた成人 9 名を対象に、携帯型ポリソムノグラフと携帯型持続血糖モニターを用いて、食生活習慣指導前後の睡眠中の血糖値変動や RMMA の発現、自律神経活動について測定し、比較検討を行いました。結果として、睡眠中の血糖値変動や RMMA の発現数、交感神経活動の有意な減少が確認され、睡眠中の血糖変動が自律神経活動に影響を及ぼし、SB の発生と関連している可能性が示唆されました。

今後はさらに被験者を増やし、睡眠中の血糖値が SB の発生に与える効果の機序に更なる検討を加え、将来的な睡眠歯科臨床へ貢献することを考えています。

最後に、本研究の遂行にあたりご指導を賜りました、徳島大学院医歯薬学研究部顎機能咬合再建学分野の松香芳三教授、大倉一夫講師をはじめ、数多くのご助言、ご協力をいただきました諸先生方に厚く御礼申し上げます。



小林高史 (東歯大)

無歯顎顎堤の高さが口腔内スキャナによるスキャン精度におよぼす影響

この度は、日本補綴歯科学会第 134 回学術大会におきまして、課題口演賞をいただきましたこと、大変光栄に存じます。

本研究は、口腔内スキャナを用いた総義歯のスキャン精度に対する、顎堤の高さ等の義歯形態の影響について検討いたしました。近年の CAD/CAM 技術を応用した総義歯製作の発展速度は速く、一般開業医や歯科訪問診療での適用も現実味を帯びています。多くの歯科医師が CAD/CAM 技術を応用した総義歯を製作する際には、使用中の義歯を口腔内スキャナ (IOS) でスキャンし、新義歯製作に応用するフローが期待されます。しかし義歯形態によってはスキャンが容易な症例と困難な症例とが存在します。我々はその要因の一つに顎堤形態に起因する義歯形態の違いがあると考えました。

数症例の義歯形態のスキャン結果を評価した結果、顎堤の高さに関わらず臨床的許容範囲内の精度は得ら

れたものの、顎堤高さが低いほど精度は高いことを明らかにし、課題口演にて発表いたしました。本研究から得られた知見は、口腔内スキャナを義歯のスキャンを応用した義歯製作法の確立に有用であり、更なる研究の発展が期待されると考えております。この受賞を励みにし、今後もデジタル技術を活用した歯科治療に貢献できるよう、研鑽を積んでまいります。

最後に、ご指導いただきました東京歯科大学老年歯科補綴学講座の上田貴之教授、竜 正大准教授ならびに講座員の先生方に厚く御礼申し上げます。



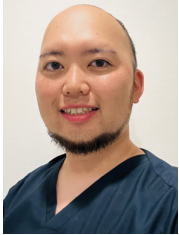
加我公行 (福歯大)

イオン徐放性フィラー含有アクリル常温重合レジンのパイオアクティブ効果

この度は、日本補綴歯科学会第 134 回学術大会におきまして、課題口演賞に選出していただき、大変光栄に存じます。

本研究では、S-PRG フィラーを配合したアクリル常温重合レジンのパイオアクティブ効果に着目し、酸性環境下での酸緩衝能、各種イオン (Al, B, F, Si, Sr, Na) の徐放、さらにはエナメル質の脱灰抑制効果について詳細に検討しました。実験の結果、S-PRG フィラーから徐放されるイオンにより、酸緩衝能が高まり、齲蝕の原因となるエナメル質の脱灰を抑制することが明らかとなりました。これにより、義歯装着者における二次齲蝕リスクの軽減しうる新たな義歯床用材料の可能性を示すことができました。高齢化社会において、補綴歯科治療に求められるのは単なる欠損補綴にとどまらず、予防医療への貢献でもあります。本研究のように、機械的特性と生体活性を両立させた材料の開発は、将来的に期待されています。今後はより臨床に近い条件下での検証や長期的な使用を見据えた耐久性評価など、更なる研究を進めてまいります。今回の受賞を励みに、患者さんの QOL 向上を目指し、材料科学と臨床現場をつなぐ研究を一層推進してまいります。本研究にご助言とご支援を賜りました先生方、共同研究者の皆様深く感謝申し上げます。

第 134 回学術大会 課題口演優秀賞



佐藤太朗（昭和医大）

睡眠時ブラキシズム患者由来神経細胞における遺伝子発現変動と神経活動の評価

この度は、日本補綴歯科学会第 134 回学術大会におきまして課題口演優秀賞にご選出いただき、大変光栄に存じます。

睡眠時ブラキシズム（SB）は、睡眠中の歯のグライインディングやクレンチングを特徴とする睡眠関連運動異常症で、顎口腔系に破壊的な影響を及ぼすことから、補綴治療の予後を左右する重要なリスクファクターとされています。しかし、その神経生理学的な発症メカニズムは不明です。

本研究では、SB 患者および健常者由来神経細胞を用い、網羅的遺伝子発現解析（バルクおよびシングル核 RNA シーケンス）と微小電極アレイ（MEA）による神経活動の評価を実施しました。その結果、SB 群では CHRM3 および GRIN2B の過剰発現が、グルタミン酸および GABA 作動性神経細胞で認められました。また MEA 解析では、培地交換後に SB 群の神経活動が有意に亢進していることが明らかになりました。RT-qPCR にて活動性が上昇した神経細胞集団でも両遺伝子の過剰発現が興奮性上昇に関与している可能性が示唆されました。

今後、これらの遺伝子と SB の関連をより詳細に調査し、発症メカニズム解明に貢献する研究を進めてまいりたいと考えております。

最後に本研究を進めるにあたり、ご指導を賜りました馬場一美教授、順天堂大学の赤松和土教授、そして貴重なご意見と多大なるご協力を賜りました諸先生方に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。



武内聡子（大阪大）

後期高齢者における義歯の状態と要介護移行との関連：OHSAKA study

この度は、日本補綴歯科学会第 134 回学術大会におきまして課題口演優秀賞にご選出いただき、大変光栄に存じます。ご選考いただきました先生方ならびに学会関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

本研究は、大阪府の約 13 万人の後期高齢者を対象とし、地域歯科健診と医療・介護の記録を統合して、義歯の使用状況および適合状態がその後の要介護状態への移行リスクにどのように関わるかを検討したものです。解析の結果、残存歯数が少ない群では、義歯の適合不良および不使用が要介護状態への移行に及ぼす影響がより大きく現れる可能性が示されました。高齢者にとって修正可能な因子である「義歯の適合状態」が、要介護という現実的かつ重大な健康転帰に対して関与していることが示唆された点は、日々の臨床に携わる歯科医師として非常に意義深いものであると受け止めております。本知見を通じて、義歯の適合状態を含む口腔管理の継続的なフォローアップが自立した生活を支える基盤であることを改めて示すことができ、心強く感じております。今回の受賞を励みに、得られた知見を地域の医療・介護の連携や保健施策へ還元し、適切な義歯管理の普及と支援体制の整備につなげていけるよう、一層精進してまいります。

最後にはなりませんが、本研究に際して多大なるご指導を賜りました池邊一典教授、共同研究機関の先生方、データ整備にご尽力くださいました皆様に心より感謝申し上げます。



野々下晋一郎（長崎大）

抗菌剤リチャージ機能を有するナノ多孔質シリカを用いた光重合型軟質リライン材の開発

この度は、公益社団法人日本補綴歯科学会第 134 回学術大会におきまして、課題口演優秀賞に選出いただき、誠に光栄に存じます。

現在、超高齢社会を迎え高度な顎堤吸収や粘膜の菲薄化によって、咀嚼時に疼痛を訴える義歯装着者が増加しています。このような症例に対しては、高い緩圧

効果を有するアクリル系軟質リライン材の使用が有効とされています。これまで当研究室では、耐久性の高い多機能アクリル系軟質リライン材の開発を目指し研究を行ってまいりました。

本研究では、抗菌剤 CPC を含有する義歯洗浄剤への浸漬によって薬剤をリチャージできる、高い緩圧効果と耐久性を併せ持つ光重合型アクリル系軟質リライン材の開発を目的として、リチャージ可能な担体であるナノ多孔質シリカに着目しました。本担体の添加が本材の物性および薬剤の徐放性に与える影響について検討を行い、その結果として物性に大きな影響を与えることなく、持続的な薬剤徐放性を付与できる可能性が示唆されました。今後は実用化に向けて、抗菌性や口腔粘膜への刺激性など更なる研究を進めていく所存です。

最後になりますが、本研究の遂行にあたりご指導とご支援を賜りました、長崎大学歯科補綴学分野 村田比呂司教授、北海道大学生体材料工学教室 吉田靖弘教授、長崎大学生体材料学分野 渡邊郁哉教授、阿部薫明准教授、およびご助言いただいた当分野の諸先生方に、深く感謝申し上げます。

第 134 回学術大会 デンツプライシロナ賞



浅井七海 (東歯大)

CAD-CAM 製局部床義歯フレームワークを想定した Co-Cr 合金の疲労強さの検証

このたびは、日本補綴歯科学会第 134 回学術大会におきまして、優秀ポスター賞 (デンツプライシロナ賞) に選出いただき、誠に光栄に存じます。

近年、CAD-CAM 技術の発展により、金属積層造形および切削加工による局部床義歯フレームワークの製作が可能となりました。すでにフレームワークに使用されるコバルトクロム合金について、金属積層造形で製作したものは鋳造のものと比較して優れた静的な機械的特性を有すると報告されており、金属積層造形で製作したフレームワークの臨床応用は進んでおります。しかし、フレームワークの口腔内での長期使用を想定した疲労強さについては十分に明らかにされておられません。そこで、本研究では、CAD-CAM 技術で

製作した局部床義歯フレームワークの耐久性を明らかにするために、金属積層造形および切削加工で製作したコバルトクロム合金製試験片の疲労強さを鋳造体と比較・検証いたしました。その結果、金属積層造形が最も大きな疲労強さを示し、切削加工は鋳造と同程度の疲労強さを示しました。今後は、フレームワークの形態での疲労強さの検証などを進め、補綴治療の発展に貢献してまいりたいと考えております。

最後に、本研究の遂行にあたりご指導賜りました東京歯科大学副学長の山下秀一郎教授、東京歯科大学パーシャルデンチャー補綴学講座の田坂彰規主任教授、岩手医科大学医療工学講座の武本真治教授に深く感謝申し上げます。また、貴重なご意見を賜りました多くの医局員の先生方にも、心より御礼申し上げます。



三浦綾子 (九歯大)

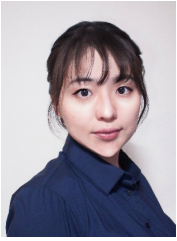
ガラスセラミックスの接着に対する低濃度フッ化水素アンモニウム水溶液の効果

この度は、公益社団法人日本補綴歯科学会第 134 回学術大会において、デンツプライシロナ賞に選出していただき、大変光栄に存じます。

フッ酸はガラスセラミックスに対して高いエッチング効果を示す一方で、国内においてはその毒性の高さから臨床応用に制限があるのが現状です。本研究では、フッ酸に代わるより安全なガラスセラミックス用エッチャントの開発を目的として、1.5%フッ化水素アンモニウム水溶液と酸を組み合わせた新規エッチャントの有効性を検討いたしました。

研究の結果、SEM 観察において新規エッチャントでもフッ酸と同様にガラスセラミックスのガラス層の溶解が確認され、特に二ケイ酸リチウムガラスにおいては、20,000 回の熱サイクル試験後もフッ酸と同等のせん断接着強さを維持することが示唆されました。今後は、新規エッチャントの生体安全性の評価を行うとともに、臨床応用に向けてさらなる検討を重ねてまいります。

最後に、本研究の遂行にあたりご指導を賜りました、九州歯科大学口腔再建補綴学分野の正木千尋教授、生体材料学分野の池田 弘教授、永松有紀助教をはじめ、日頃より研究を支えてくださっている教室の皆様に、心より御礼申し上げます。



李 彬（科学大）

引張り及び圧縮応力がインプラント周囲骨の骨吸収および骨形成パラメータに及ぼす影響

この度は、日本補綴歯科学会第134回学術大会において、優秀ポスター賞（デンツプライシロナ賞）にご選出いただき、大変光栄に存じます。

インプラント補綴治療において、過大な機械的負荷がインプラント周囲骨の骨吸収を引き起こす恐れがあることは臨床的に長らく提唱されてきました。しかし、機械的負荷がインプラント周囲骨の骨吸収・骨形成にもたらす影響はいまだに一定のコンセンサスが得られておらず、加えて機械的負荷によって歯槽骨内に発生する部位特異的な応力には引張や圧縮といった応力特性があるにも関わらず、これらの応力特性と骨量維持との関係性は生体内では十分に検証されてきませんでした。

そこで本研究では、実際の口腔組織の μ CTデータを基に構築した有限要素解析モデルから算出した応力分布図と同部位の組織像を重ね合わせることで、力学的・組織学的観点の双方から歯槽骨内の応力が骨吸収・骨形成に与える影響を検討しました。その結果、インプラントの予後に重大な影響を及ぼす周囲の骨吸収・骨形成は、その部位に生じた引張応力および圧縮応力の大きさと分布により制御されることを明らかにしました。この結果は、インプラント補綴の術前診断として力学的分析を行うことの有効性と必要性を示唆しており、今後さらに研究を継続することで、インプラント周囲骨における病的な骨代謝異常や局所的な骨吸収を予防するための、より正確な診断法の開発につなげたいと考えています。最後になりましたが、本研究に際して多大なるご指導を賜りました若林則幸教授、青木和広教授ならびに研究遂行にあたり数多くの助言やご協力をいただきました諸先生方にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。



重本修伺（鶴見大）

下顎の運動軸による顎機能評価 — 全運動軸と最小運動軸の空間的特徴 —

このたび、日本補綴歯科学会第134回学術大会にて優秀ポスター賞（デンツプライシロナ賞）を受賞できたこと、大変光栄に存じます。さらに、大学の同級生であり、共に研究を進めている京都で開業の杉元敬弘先生（カボプランメカ賞）と同時受賞できたことは、喜びもひとしおです。

補綴治療の目的は形態と機能の回復・維持ですが、顎機能の評価には患者の主観や歯科医師の経験に依存する部分が多く、客観的な評価法の確立が求められています。我々の研究グループでは、顎口腔の形態・機能のデジタル化を進め、患者さん一人一人に対するモデルをサイバー空間に作成し、生体データを蓄積し、そこに疾患・障害や現症を再現し、AI技術等で分析することで個々の患者に最適な治療の決定や予後予測を可能にする「Dental Digital Twin」の開発に取り組んでおり、顎運動情報から得られる全運動軸（KA）と最小運動軸（LMA）の用いた顎機能の客観的評価法について検討しています。

本発表では、健常者群と患者群のKAとLMAの空間的特徴を解析した結果、健常者群と患者群で異なる傾向が認められ、顎機能の客観評価に有効である可能性が示唆されました。今後は、顎運動情報と形態情報（歯列、顎関節など）を統合して解析することで、より精度の高い診断法の構築を目指します。

最後に、小川教授をはじめ共同研究者の皆様へ心より感謝申し上げます。



長野敏樹（長崎大）

同種iPS細胞由来巨核球を応用した新規歯槽骨再生治療の開発

この度は、日本補綴歯科学会第134回学術大会にて、数々の素晴らしい研究発表の中から栄えある賞をいただき大変光栄に思っております。同時に、日頃よりご指導いただいている先生方や、共同研究をさせていただく企業の皆様へ感謝申し上げます。骨関連の研究は全世界で盛んに進められていますが、本研究は骨再生に対してiPS細胞由来巨核球の応用という、他に

類を見ない角度からアプローチをしております。学会発表中は本研究課題に興味を持っていただいた先生方から、幾つものご質問をいただき非常に活発な議論が展開できました。併せて感謝申し上げます。

また、本研究課題はインプラント治療における顎骨の骨造成を治療対象としております。今回の発表に関しては、*in vivo*での細胞移植実験に加え、*in vitro*での細胞間相互作用の解析を行いました。独自性の高い研究である反面、生体内で起こっている細胞の挙動を詳細に解明するのは非常に難しいところです。しかし、その複雑に入り組んだ構造を少しずつですが解明できてきているようにも感じています。また、日頃臨床に従事する歯科医師として、研究内容が基礎研究の段階で留まるのはもったいないと感じます。もちろんすべての研究が臨床応用される訳ではありませんが、本研究で使用する iPS 細胞由来巨核球は大きな可能性を秘めていると感じています。今回の発表は本研究課題の第一歩に過ぎず、将来的な臨床応用には更なるデータの積み上げが必要なため、今後もより詳細な解析を進めていくことができると考えております。



成原大衣智 (東北大)

静電誘導型発電シートを用いた口腔内装置型リアルタイム咬合力測定装置の開発

この度は、日本補綴歯科学会第134回学術大会優秀ポスター賞（デンプライシロナ賞）を賜り、大変光栄に存じます。選考いただきました先生方へ心より感謝申し上げます。

ブラキシズムなどのパラファンクション時に歯列上に発現する過大な咬合力は、Tooth Wearや補綴装置の破損、顎関節症の発症などの要因となることが知られております。しかしながら、実際のパラファンクション発生時に歯列上に発現する咬合接触部位、同部位における咬合力の大きさを客観的に把握しうる方法はいまだないのが現状です。

そこで我々は、エレクトレットと誘電エラストマーより構成される薄膜状センサーである静電誘導型発電シートに着目し、口腔内装置に埋め込む形で測定装置の開発を進めております。今回の学会では、本装置の基盤技術を確認するための第一段階として、プロトタイプを用いての下顎機能運動時の測定結果を発表させていただきました。今回の受賞を励みに、本研究を更

に発展させ、睡眠時ブラキシズムなどのパラファンクショナルな運動における実測を目指したいと考えております。

最後になりますが、本発表にあたりご指導を賜りました東北大学の依田信裕教授、東京科学大学の土方亘先生をはじめ、ご協力いただいた多くの先生方に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



第134回学術大会 カボプランメカ賞



富田凜太郎 (神歯大)

裸眼立体視環境における支台歯形成シミュレーターの開発と実証

この度は、令和6年度公益社団法人日本補綴歯科学会カボプランメカ賞に選出いただき、大変光栄に存じます。受賞に際し、査読や選考にご尽力いただいたすべての方々に、心より感謝申し上げます。

歯科診療における手技向上は歯科教育において重要な項目の一つであり、近年ではVRを投影できる装着型デバイスを活用した歯科診療トレーニングが開発され評価を得ています。しかし装着型デバイスでは衛生的欠点や臨床と比較した視覚的距離感覚の不一致などの視覚的欠点があります。そこで我々はより臨床に近似した環境を構築するため、裸眼立体視が可能な空間再現ディスプレイ（SRD）を用いた支台歯形成シミュレーターを独自開発し検証しました。本システムは視覚再現にSRD、触覚再現にはペン型ハプティクスデバイスを組み込み、ディスプレイをあらゆる角度から観測することで裸眼で立体視ができ、口腔内スキャナで読み込んだ歯型データを切削し自動採点する機能を搭載しております。2Dディスプレイを用いた同システムと比較検証したところ、SRDは支台歯形成トレーニングにおいて有用性が示唆されました。

今後は更に本システムの操作性と自動採点機能の充実を目指し、歯科教育の発展に微力ながらも貢献できるよう尽くしてまいりたいと考えております。

最後に、本研究の遂行にあたりご指導を賜りました、神奈川歯科大学歯科補綴学クラウンブリッジ補綴学分野の木本克彦教授をはじめ、数多くの御助言、御協力をいただきました諸先生方に厚く御礼申し上げます。

**杉元敬弘（鶴見大）**

顎骨の著しい骨格性非対称症例に対して顎運動情報を用いて咬合再構成を行った1例

このたびは、日本補綴歯科学会第134回学術大会におきまして、優秀ポスター賞（カボプランメカ賞）を賜り、誠に光栄に存じます。

本発表では、下顎骨体や顎関節に著しい左右差を有し、咬合再構成が必要な症例を対象として報告いたしました。従来、適切な咬合平面を新たに設定するための客観的かつ機能的基準は存在しませんでした。本症例では患者の形態情報と顎運動情報を統合的に評価することで咬合平面を決定し、良好な結果を得ることができました。

術前の画像診断では、咬合平面は顔貌に対して左上がりに傾斜し、形態的指標である下顎孔やXiポイントを結ぶ線も左上がりを示していました。さらに、顎運動情報から得られる最小運動軸も同様に左上がりを示したことより、形態的・機能的両面からこの傾斜が適正であると診断しました。これを補綴設計に反映した結果、生体に調和した咬合再構成が可能であったと考えます。

このことから、形態的非対称症例においては、左右対称性の回復を盲目的に追求するのではなく、機能情報を加えて評価することが重要であり、より適切な補綴設計につながると示唆されました。

最後に、日頃より多大なるご指導とご協力を賜りました鶴見大学歯学部クラウンブリッジ補綴学講座の小川匠教授、ならびに講座員の先生方に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

Prosthodontic Meeting for Next Generation 2025 開催報告

Prosthodontic Meeting for Next Generation 2025 が、3 月 28 日 (金)、29 日 (土) の 2 日間にかわたり、琵琶湖グランドホテル (滋賀県大津市) において開催されました。本研修会は、若手会員育成のための研究に特化した会として企画され、学会として 3 回目、対面形式での現地開催となりました。今回は、理事 8 名、特命委員 6 名、参加者 70 名 (歯科医師 51 名、歯科衛生士 2 名、歯科技工士 7 名、学生 10 名) の参加をいただきました。

特別講演では、小川 匠 (特命委員会) による「補綴治療とエンドポイントーおいしく食べるを目指してー」、澤瀬 隆先生 (学術委員会) による「補綴の治療計画ってむずかしい! ?」と題した講演が行われました。また、前大会の振り返りとして、特命委員の峰祐一先生より丁寧なご報告をいただきました。

口演発表では合計 14 題 (一般口演 10 題、うち歯学部 5 年生 1 題、歯科衛生士・歯科技工士連携の 4 題) が行われ、それぞれ活発な質疑応答が交わされ、充実したディスカッションの場となりました。

Student Clinical Skills Competition では、四ツ谷護先生から「本学の支台歯形成実習における臨床技術向上のための取り組み」として、東京歯科大学にお

ける支台歯形成実習の実践をご紹介いただきました。また、平井由衣さん (歯学部 5 年生) からは「JPS SCSC を通じて一学生にどう伝える? 補綴の魅力ー」と題し、学生アンケートの結果に基づき補綴学教育に対する学生の視点を考察した発表をいただきました。どちらの発表も学生教育に有意義な示唆を与えるものでした。

最終セッションでは、大久保力廣次期理事長から「国民に尊敬される補綴歯科専門医を目指して」と題した講演が行われ、今後の補綴歯科学会の展望と方針を示されました。その後のグループディスカッションでは、「今後の日本補綴歯科学会のあり方について」、特に「日本補綴歯科学会に若手歯科医師・歯科衛生士・歯科技工士が求めるもの」というテーマを設定し、10 班 (各約 5 名) によるワールドカフェ形式で議論が展開されました。

学生、歯科衛生士、歯科技工士、歯科医師が一堂に会し、大学や職種を超えた交流を通じて活発な議論が行われました。事後アンケートでも「有意義であった」という回答が多数寄せられ、本研修会が充実した内容であったことが改めて確認されました。

(特命委員会Ⅱ若手育成委員長 小川 匠)



参加者とスタッフ



グループ討論

社会連携委員会の活動報告

社会連携委員会では、生涯学習公開セミナーや市民フォーラムの運営、補綴歯科啓発を目的としたポスターの製作・配布などを通じて、国民に向けてさまざまな情報提供を行ってまいりました。本稿では、その一部をご紹介します。

日本歯科専門医機構が認定する基本的な診療領域に係る専門資格には、口腔外科、歯周病、歯科麻酔、小児歯科、歯科放射線などがあります。令和5年10月12日には『補綴歯科』も認定され、『補綴歯科専門医』として広告が可能となりました。

そこで窪木理事長指導のもと、本委員会では『補綴歯科専門医』を医療従事者のみならず、歯学部生や一般国民に広く知っていただくことを目的に、啓発ポスター（図1）を製作し、令和6年12月に日本歯科専門医機構認定の補綴歯科専門医認定研修機関へ送付いたしました。病院や大学などに掲示いただくことで、『補綴歯科専門医』の認知度向上に寄与できれば幸いです。また、これを契機として、補綴歯科専門医を目指して本学会に入会する会員数の増加も期待しております。さらに、患者の皆様を知っていただくことで、確かな技術・知識を有する歯科医師や歯科医院を選ぶ際の参考となることを願っております。

補綴歯科専門医の認知度を上げるためには、まずは『補綴』がどのように国民医療へ貢献できるかを知ってもらうことにかかっております。また、『補綴』という言葉は、歯科医師の間では一般的に使用されます

が、歯科関係者以外にはあまり馴染みがなく、読み方を知らない方も多くいらっしゃいます。このため、『補綴歯科専門医』の啓発とともに、『補綴』についても国民に広く知っていただく活動を行ってまいりました。

本委員会では、『補綴』歯科治療を啓発するポスター（図2）を製作し、日本補綴歯科学会誌17巻3号に同封する形で全会員に配布いたしました。ポスターには『補綴』にルビをふり、まずは読み方から理解いただけるようデザインしています。また、ポスター内のQRコードを読み込むと、広報委員会と共同で製作した一般向けウェブサイト「『補綴（ほてつ）歯科』ってどんな治療？」にアクセスできます。先生方におかれましては、ポスターを院内等に掲示し、患者の皆様への情報提供としてご活用いただければ幸いです。一般向けウェブサイトもぜひご覧いただき、本学会が提供する情報をご確認ください。

さらに、『補綴』歯科治療を啓発するポスターはクリアファイルとしても配布されており、令和7年5月18日に開催された第134回日本補綴歯科学会学術大会の市民フォーラムで参加者に配布されました。部数には余裕がありますので、今後の市民フォーラムでも配布されると思います。ご興味のある先生方は、今後の学術大会の市民フォーラムにぜひご参加ください。

（社会連携委員会委員長 新谷明一）



図1 『補綴歯科専門医』啓発ポスター



図2 『補綴（ほてつ）』啓発ポスター

近況報告:JPR編集委員会

2025 年 6 月に最新のジャーナル・インパクトファクター (IF) が発表され、本学会の公式英文誌 Journal of Prosthodontic Research (JPR) の 2024 年 IF 値は 3.4 となり、前年より 0.2 ポイント上昇しました。JPR は補綴歯科領域のトップジャーナルであるのみならず、歯学全体でもベスト 25% (Q1) の地位を 9 年連続で維持しています (図 1)。

私が 2021 年に編集長を拝命してから 4 年余り、道のりは決して平たんではありませんでした。就任当時、JPR は主に財政上の理由から大手出版社 Elsevier を離れ、政府系プラットフォーム J-Stage へ移行した直後であり、出版社に依存していた業務を委員会で内製化する体制づくりが第一の任務でした。信頼低下を避けるべく、迅速かつ質の高い査読体制の整備に加え、投稿規定の見直し、表紙・組版デザインの刷新、ホームページや動画の作成、メールマガジンや SNS 発信、学術大会でのブース展示、国際学会や海外提携校での執筆セミナー、他誌編集長との情報共有など、多彩な活動に取り組んでまいりました。

編集委員の先生方には、日常の査読編集作業に加え、引用分析、企画・戦略立案、広報などをチーム体制で分担いただいています。その献身的なご尽力のおかげ

で、委員会は私の第 1 期 12 名から、第 2 期 18 名、第 3 期 20 名へと拡充され、活動の幅が着実に広がっています。この場を借りて、歴代ならびに現委員会の先生方に深甚なる感謝を申し上げます。

こうした成果として、過去 5 年間で欧米からのアクセス数は倍増し 20 万件を突破、Instagram フォロワーも 7,100 名を超え、まもなく 1 万人に到達する勢いです (図 2)。まさに JPR は「アジアの補綴誌」から「世界の歯学誌」へと飛躍しました。投稿数の増加に伴い、委員や査読をお願いする会員の皆様には多大なご負担をおかけしておりますが、学会英文誌は本学会の国際的プレゼンスを示す重要な基盤ですので、引き続きご理解とご協力をお願い申し上げます。

2023 年の G7 仙台科学技術大臣会合では「オープンサイエンスの推進」が共同声明で謳われました。編集長として、JPR が我が国におけるオープンサイエンス推進の一翼を担うとともに、単に IF 値にとらわれず、国際公共財として世界に尊敬される日本発のトップ歯科ジャーナルを目指して邁進してまいります。

今後とも、JPR のさらなる発展に向け、変わらぬご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

(JPR 編集委員会委員長 江草 宏)



図 1. JPR の最新 IF 値 (3.4) と過去 10 年間の推移



図 2. JPR の公式 Instagram (ぜひフォローをお願いします)

第134回学術大会における日本顎咬合学会との調印式

2025年5月17日(土)に、日本顎咬合学会との連携協定に関する調印式が第134回学術大会の会場である長崎市出島メッセで執り行われました。連携協定について下記の4つが確認されました。

1. 学術交流の活性化：学術大会におけるシンポジウムや研究・教育・臨床セミナー等を共催し、学問領域間や学会間の相互理解、および双方の会員の知識の幅の拡大を図る。
2. 共同臨床研究の推進：大学等研究機関から日常臨床の現場に至るまで幅広いフィールドから質の高い臨床アウトカム情報を系統立てて収集し、それらの情報を基に臨床エビデンスを構築し広く公表する。
3. 顎口腔機能・咬合機能に関する研鑽：口腔機能に関する既存の教育事業の共有により、口腔機能・咬合機能に関する知識の向上を図り、歯科医療を通じた国民の健康増進に貢献する。
4. 専門医制度の推進：一般社団法人日本歯科専門医

機構に認定されている「補綴歯科専門医」制度の更なる推進を図る。

また、顎咬合学会の貞光謙一郎理事長と本学会の窪木前理事長より連携協定の意義と経緯、協定の内容が報告され、さらに両学会がこの連携に期待するメリットについても述べられました。

協定書への調印後、両名による固い握手が交わされ、今後の発展を祈念して終了しました。

また、2025年6月7日には第43回日本顎咬合学会学術大会・総会において両学会の連携協定セレモニーが開催されました。本学会からは窪木前理事長、大久保理事長、近藤学会連携委員会委員長が登壇し、日本顎咬合学会会員の先生方にも連携協定の内容が報告されました。

今後も日本顎咬合学会との更なる交流が発展していくことを期待しております。

(学会連携委員会委員長 近藤尚知)

【第134回学術大会での調印式】



協定書に調印する窪木前理事長（左）と貞光理事長（右）

【第43回日本顎咬合学会学術大会・総会での連携協定セレモニー】



今後の連携活動について報告する窪木前理事長



調印後協定書を披露する窪木前理事長（前列左）と貞光理事長（前列右）



協定書を披露する貞光理事長（左）と窪木前理事長（右）

「補綴歯科って何？キャンペーン」実施報告

2025年2月10日から3月21日の期間、「補綴（ほてつ）歯科」という言葉の認知度が一般国民の間で十分に広がっていない現状を踏まえ、より多くの方々に「補綴（ほてつ）歯科」の意味や役割を知ってもらうことを目的に「補綴歯科って何？キャンペーン」を実施いたしました。

キャンペーンの実施にあたっては、デンタルダイヤモンド社の協力のもと、2024年11月19日に国民向けのランディングページ（LP）を開設し、各種広告によって訪問を促進、参加者がクイズとアンケートに答える形式を取り、楽しみながら知識を深めてもらう参加型の啓発活動として展開しました。キャンペーン期間中、広告誘導は2025年2月20日から3月21日まで実施し、Google, YouTube, Yahoo! Japan, Facebook, Instagram, LINE, SmartNewsといった複数のインターネット媒体にてLPへの誘導広告を配信しました。各媒体の特性を活かし、年代・性別を問わず幅広い層への効果的なリーチを実現する運用を行い、その結果、アンケートへの応募総数は1,724名となり、うち1,383名が今回のキャンペーンで初めて「補綴（ほてつ）」という言葉を知ったと回答しました。これは応募者全体の約80%にあたり、キャンペーンの目的である認知度向上に大きく貢献したと言えます。広告配信においては、媒体ごとに異なる

ターゲット層への最適化を図りました。Google および Yahoo! Japan では、25～34歳の若年層男性を中心に効率良くリーチし、クリック率は他案件を上回る好成績を記録しました。また、YouTubeでは55歳以上の高年齢層へのアプローチが特に成功し、インストリーム広告においては視聴率が70%を超えるという非常に高い数値となりました。Facebook および Instagram では、30代以上の女性への配信量とパフォーマンスが高く、通常の平均を大きく上回る成果が見られました。さらに、LINE や SmartNews では年齢が上がるにつれて広告のパフォーマンスが向上する傾向が明確に見られ、特に SmartNews においては70歳以上のクリック率が最も高くなりました。広告ビジュアルに関しても、年代や性別を問わず広く受け入れられ、高いパフォーマンスの一因となったと考えられます。

今回のキャンペーンは、媒体ごとの特性を活かした広告展開により、年代・性別を問わず幅広い層に対して「補綴歯科」への関心を高めることができました。特に若年層男性や高齢層、女性層といった多様なターゲットへのアプローチが奏功し、多くの方に「補綴（ほてつ）歯科」を知っていただく貴重な機会となったと考えています。

（広報委員会幹事 高野智史）



国民向けランディングページ（LP）



補綴（ほてつ）歯科広報用動画の一例

会員増計画作成ワークショップ開催の報告

2025年3月22日(土)、23日(日)の2日間、将来構想ワークショップと同時開催でJPS会員増対策検討ワーキンググループ(ワーキンググループ長:上田貴之広報委員長)による「会員増計画作成ワークショップ」が対面形式にて開催されました。本ワークショップは、本会正会員(歯科医師会員)数を増やすために、(1)会員の新規獲得のためのキャンペーン施策、(2)退会会員の再入会促進のための施策、ならびに、(3)退会者、特に会費未納による自然退会者の減少のための施策を検討し、令和7年度に各委員会にて実行可能な案を作成することを目的として実施されました。

ワーキンググループメンバーは、Aグループは秋山謙太郎先生、猪越正直先生、黒嶋伸一郎先生、水橋史先生、Bグループは熱田生先生、金澤学先生、新谷明一先生、依田信裕先生で構成されました。

2日間を通じて、「新規会員獲得のための施策」と「再入会者を増やすための施策・自然退会者減少のための施策」のテーマでグループディスカッションを行いました。現状分析では、大学退職後の退会者が多いこと

や新入会者へのフォロー体制の不足などが課題として挙げられました。

グループワーク後には、将来構想ワークショップとの合同セッションで発表を行い、参加者全員による白熱した議論が交わされました。提案としては、「学術大会における若手歯科医師向け臨床セッションの充実」「SNSや動画を活用した広報戦略の強化」「短時間の動画コンテンツのオンデマンド配信」「日本補綴歯科学会アプリ開発による単位確認、専門医等への申請の簡略化」など、実効性の高い意見が多数挙がりました。

今後は、本ワークショップで出た提案をもとに、実現可能な施策を整理し、各委員会にて具体的な実行計画へとつなげてまいります。本ワークショップが、会員増加に向けた取り組みの第一歩となることを期待しています。

最後に、ご参加いただいた先生方に心より感謝申し上げます。

(JPS会員増対策検討ワーキンググループ幹事
太田 緑)



窪木理事長による講演『今後の日本補綴歯科学会の在り方について』



グループワークの風景



会員増計画作成ワークショップと将来構想ワークショップの合同セッションの様子

JPS将来構想ワークショップ報告

2025 年 3 月 22 日 (土), 23 日 (日) の 2 日間, 日本補綴歯科学会の理事長, 副理事長をはじめ, 理事, 監事の先生方が 15 名集合し, 東京都港区芝の友愛会館会議室で, JPS 将来構想ワークショップを開催しました。ワークショップの主題は「日本補綴歯科学会の将来に必要な施策」であり, 「日本補綴歯科学会の将来的な発展を促進するために, 本会が進める事業について検討を行い, 必要な施策を作成する」を一般目標としました。当日は同日程で, 補綴歯科学会の若手の教授が主体となった JPS 会員増対策検討ワーキンググループによる会員増計画作成ワークショップも同じ場所の隣接する会議室で開催されました。

22 日は, 理事会終了後, 徒歩で事務局から会場に移動しました。16 時から, 将来構想・会員増検討対策 WG 合同セッションとして, 開会の辞・開催趣旨説明を小見山から行い, 次いで「今後の日本補綴歯科学会のありかたについて」という演目で窪木拓男理事長からご講演いただきました。その後, 会員増検討対策 WG とは別れて別の部屋でワークショップを開始しました。将来構想ワークショップは参加者を 2 グループに分け, まずは事前に会員に行ったアンケート結果を振り返りながら, KJ 法で JPS 将来構想の重要項目の列举と, 重要性と緊急性を二次元展開するグループワークを行いました。その後, 全体討議で各グループからの発表を聞いて, それぞれのグループの内容を修正し, 各グループで今後の短期計画, 中期計画

における優先事項を決定する作業を行いました。初日の作業はここまでとなり, その後は, 将来構想・会員増検討対策 WG 合同での情報交換会となり, 熱い会話が各所で展開されました。朝方までお元気な方もいらっしやったようです。

23 日は, 朝 9 時からの全体討議での各グループからの発表の後, 全員で短期計画, 中期計画 (案) の作成を行いました。10 時 30 分からは, 将来構想・会員増検討対策 WG 合同セッションを行い, 将来構想 WG と会員増検討対策 WG からの発表に対して, 全員で討議しました。最後は窪木理事長の総括をいただき, 大久保副理事長からの閉会の辞をもって, 12 時には散会となりました。

JPS 将来構想ワークショップにおけるプロダクトのタイトルは「国民に尊敬される補綴歯科専門医を目指して」とし, 短期計画 (2 年), 中期計画 (4 年) を報告しました。詳細については, ホームページ等に掲載する予定です。

今回のワークショップは, 窪木理事長から大久保新理事長への事業継承の意味合いを持ち, 今後の 2 年間の道筋を明確にするものとなりました。準備の段から当日の実務まで, ご協力いただいた東京歯科大学の上田貴之先生と太田 緑先生にはこの場を借りて感謝申し上げます。また, お忙しい中, ご参加いただいた皆様にも感謝申し上げます。

(総務理事 小見山 道)



将来構想ワークショップでのグループ間討議の様子



2つのワーキングの合同セッションでの様子

Future Leaders in Prosthodontics (FLiP) 14 in Nagasakiを終えて

この度、2025年5月13日～15日にヒルトン長崎にて、本学会共催のもとFLiP 14を開催することができました。FLiPは、次世代を担う補綴歯科界のリーダーを育成することを目的に、2012年にSreenivas Koka先生とNeal Garrett先生が設立したワークショップ(WS)です。2023年、上海でのICP学術大会ガラディナーの席上で、Koka先生が「14回目となる次回は日本で開催してはどうか」と話題を振っていただいたことがきっかけとなり、今回の日本初開催が実現しました。

本WSは、対話を重視したネットワーキングの形成に力点を置き、少人数制を基本方針としています。参加者は、提出された申請書をFLiP本部が審査し、最終的に9か国から23名(うち本学会員14名)が選出されました(表1)。講師は補綴歯科関連分野の9名で構成されました(表2)。選考にあたっては国際的な多様性に加え、男女比を重視する姿勢が強く印象に残りました。

初日は、開会前の午後に関係者一同で出島を散策し、初対面ながら交流を深めました(写真1)。夕刻よりWSが開会し、ホスト役を務めた筆者とFrauke先生の挨拶に続き、Koka先生、多田先生によるアイスブレイクセッションが行われました。ここでは参加者全員が自己紹介スライドを用いて互いを知り合い、和やかな雰囲気の中に初日を終えました。

二日目は、会場隣室での全員そろっての朝食から始まり、その後、Koka先生、馬場先生をはじめとする各講師によるレクチャーとディスカッションが続きました(写真2)。本WSの面白いところは、補綴歯科に関連するテーマを扱いながらも、その根幹が「リーダー育成」にある点です。アカデミアにとどまらず、地域医療や病院運営など多様なキャリア形成に通じるリーダーシップの在り方について、グループワークを通じて議論を深められる大変貴重な機会となりました。

夕刻からはシャトルバスで稲佐山中腹のルークプラザホテルへ移動し、懇親会が開催されました。長崎の街と港を一望する絶景の会場にて、Koka先生、窪木理事長をはじめ、Frauke先生と私(講師代表)、大川先生と秋葉先生(参加者代表)がそれぞれFLiPへの想いをスピーチし、和やかな雰囲気の中でさらに一体感が高まりました(写真3)。この高まりのせいか、懇親会後には私の“悪友”たちが日本文化を深掘りし

表1 FLiP 14 参加者 (下線: 本学会員)

<u>Yosuke Akiba</u>	<u>Niigata, Japan</u>
Amylia Bal	Sydney, Australia
Garima Charan	London, UK
David Chvartszaid	Toronto, Canada
<u>Yohei Hama</u>	<u>Tokyo, Japan</u>
<u>Masanao Inokoshi</u>	<u>Tokyo, Japan</u>
<u>Yohei Jinno</u>	<u>Fukuoka, Japan</u>
<u>Takeru Kondo</u>	<u>Sendai, Japan</u>
Yi-Hao Lan	Taipei, Taiwan, ROC
Mai Miyachi	Tokyo, Japan
Ritsuko Miyachi	Tokyo, Japan
<u>Taro Mukaibo</u>	<u>Fukuoka, Japan</u>
<u>Natsuko Murakami</u>	<u>Tokyo, Japan</u>
<u>Syuntaro Nomoto</u>	<u>Tokyo, Japan</u>
<u>Hiroko Okawa</u>	<u>Sendai, Japan</u>
<u>Ji-Man Park</u>	<u>Seoul, South Korea</u>
<u>Pimduen Rungsiyakull</u>	<u>Chiang Mai, Thailand</u>
Raelene Sambrook	London, UK
<u>Hanako Suenaga</u>	<u>Sydney, Australia</u>
<u>Kensuke Takakusaki</u>	<u>Tokyo, Japan</u>
<u>Hao Yu</u>	<u>Fuzhou, China</u>
Majid Zakeri	Toronto, Canada
Eran Zenziper	Tel Aviv, Israel

表2 FLiP 14 講師 (下線: 本学会員)

Limor Avivi-Arber	Toronto, Canada
<u>Kazuyoshi Baba</u>	<u>Tokyo, Japan</u>
<u>Hiroshi Egusa</u>	<u>Sendai, Japan</u>
Sreenivas Koka	Mississippi, USA
Maria Menini	Genova, Italy
Frauke Müller	Geneva, Switzerland
Adrien Naveau	Bordeaux, France
Elizabeth O Carr	Mississippi, USA
<u>Sayaka Tada</u>	<u>Singapore, Japan</u>

たいとのことで、国籍の異なる6名による国際カオケ大会となり、さらに遅くまで親睦を深めることになりました(余談ながら)。

三日目の最終日も全員での朝食から始まり、講師によるレクチャーが続きました。最初のセッションを担当した私は、前夜(数時間前)の文化交流のダメージを残しつつも、アーリーキャリア期における臨床・研究活動(論文執筆)を通じたチーム形成の経験が、その後のアカデミアにおけるリーダーシップにいかに重要であるかについてお話しさせていただきました。その後もFrauke先生、多田先生をはじめとするキャリア形成やリーダーシップを鼓舞する素晴らしいセッ

ションが続き、最後のセッションでは Koka 先生がリーダーシップの「光と影」を実体験に基づき語られ、参加者はそれぞれの立場から深い学びを得て、修了式をもって二日半の WS を締めくくりました。

閉会後の会場には、名残惜しさと心地よい達成感が入り混じった清々しい雰囲気が漂い（写真4）、参加者の笑顔からはリーダーとしての自覚の芽生えを垣間見ることができました。今後、参加者は FLiP 卒業生として同窓会を通じて再会を果たし、互いに刺激を受けながらさらにリーダーとして成長し続けることでしょう。本学会から国際的に活躍するリーダーが育ち、輩出されていくことを心より願っております。

最後に、本 WS をスポンサーとしてご支援いただきました株式会社 NSK/Nakanishi 様、ならびに懇親会の全費用を支援くださった Koka 先生に厚く御礼申し上げます。また、FLiP14 の誘致から開催に至るまで全面的にご支援いただいた窪木拓男前理事長、大久保力廣先生、小見山 道先生、前理事の先生方、そして会場・宿泊など運営準備にご尽力くださった村田比呂司先生、澤瀬 隆先生、鳥巢哲朗先生、原田佳枝先生をはじめとする長崎大学のスタッフ・準備委員会の皆様に、心より感謝申し上げます。

(Chair, FLiP 14 Local Organization Committee
東北大学大学院歯学研究科 江草 宏)



写真1 関係者一同で出島を散策



写真2 レクチャーの様子（Koka 先生）



写真4 閉会後の様子



写真3 懇親会にて

令和6年度 公益社団法人日本補綴歯科学会 特別功労賞、学術賞 受賞者の声

令和6年度 特別功労賞



魚島勝美
新潟大学

この度令和7年度学術大会の折に開催された臨時総会において、日本補綴歯科学会特別功労賞をいただきました。これまでに本学会からはとても多くのことを与えていただいたにもかかわらず、私がどれほど本学会に貢献できたかを顧みますに、さして大きなことはできずに参りましたので、身に余る光栄と存じます。

大学卒業後、インプラント、口腔外科、基礎研究、教育と、その時々で専門が異なる珍しい経歴を持つ私ですが、常に軸足は補綴に置いていたのだと思っています。特に、新潟大学に赴任してからは、当時の補綴学教室教授で学術委員長であった河野先生のお引き立てで学術委員会に加えていただき、以降長年にわたって各種委員会に参画させていただきました。また、理事として教育問題検討委員会と用語検討委員会を担当させていただいたことは、私にとってとても良い勉強の場になりました。

私が常々申し上げていることは、補綴専門医は患者さんの機能回復の最終段階を司る、いわば歯科医療のコンダクターであるということです。すでに大学は退職した身ではございますが、今後もより良い歯科医療を目指して精進して参ります。

末筆ではございますが、この度の受賞にご尽力くださった前理事長の窪木拓男先生をはじめ、関係各位にはこの場をお借りして衷心より感謝申し上げます。私のご挨拶とさせていただきます。どうも有難うございました。



河相安彦
日本大学松戸歯学部

このたびは、思いもよらぬご推挙をいただき、「特別功労賞」という名誉ある賞を賜りました。窪木拓男前理事長および大久保力廣理事長ならびに関係各位に心より御礼申し上げます。

日本補綴歯科学会では理事として6年間、修練医・認定医・専門医制度委員会を所掌させていただき、その中で補綴歯科専門医の広告開示に取り組む機会を得られたことは、大変意義深い経験となりました。また、第133回学術大会では大会長を拝命し、多くの方々のご支援のもとで無事に開催できたことも、今回の受賞につながったのではないかと感じております。こうした取り組みを成し得たのは、ひとえに、関係各位のご協力と温かなご指導と弊講座員のご支援によるもので、ここに深く感謝の意を表します。

補綴歯科は言うまでもなく、患者の生活の質に直接寄与するゆえ、矜持を持つに値する素晴らしい学問領域です。次世代を担う会員の支援に、学会をあげて取り組まれているところですが、これからの世代には挑戦を恐れずに新たな道を切り開き、補綴歯科を更に発展させていかれることを、心から期待しております。

末筆になりますが、日本補綴歯科学会の更なるご発展を祈念申し上げます。



佐藤裕二
さとう歯科（中国・四国支部）

このたび、特別功労賞という大変名誉ある賞をいただき、心より感謝申し上げます。受賞の知らせをいただいたときは驚きとともに、これまで支えてくださった多くの先生方や仲間の顔が浮かびました。改めて、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

日本補綴歯科学会では、2023年度に名誉会員の称号、2024年度に学術賞、そして今回の特別功労賞と、3年続けて大きな栄誉をいただきました。身に余る光

栄であり、感謝の気持ちでいっぱいです。

これまでの活動としては、2 期にわたり理事を務めさせていただきました。2007 年度には平井理事長のもと、研究企画推進委員会で「全部床義歯治療時間に関する歯科医師の意識調査」や「義歯診察・検査記録用紙の作成」、「クラウン診察・検査方法および判断基準マニュアルの作成」などに取り組みました。2019 年度には大川理事長のもと、広報委員会で「メルマガや学会ホームページの整理」、「Facebook の開始」、「補綴の日（4 月 12 日）の制定」などを進めました。

正直なところ、私の性格ゆえ、委員長としては扱いにくい場面もあったかと思います。それでも、辛抱強く見守ってくださった理事長先生方や、温かく支え、共に走ってくださった幹事の先生方をはじめ、多くの方々には感謝の言葉しかありません。

この学会で活動し、多くの学びと出会いをいただけたことは、私の財産です。これからも学会の更なる発展を心より願いながら、このたびの受賞に改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



藤澤政紀

医療法人社団 新心会
明海大学

この度は令和 6 年度日本補綴歯科学会特別功労賞という栄誉を賜りましたこと、大変光栄に存じ、心より

感謝申し上げます。

補綴との衝撃的な出会いは卒業を控えた 6 年生の秋のことでした。顎関節症患者が補綴処置により劇的に改善したケースを臨床講義で解説され、それまで想像したこともなかった補綴臨床の魔法に深く感銘を受けました。そして岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座（石橋寛二教授）の門をたたくこととなりました。

やがて、咬合と顎関節症の関連性に疑義が唱えられる大きな潮流の中で、「エビデンスは自らの手で」と、講座をあげて 10 年にわたる前向きコホート調査を実施しました。その成果を本会をはじめ関連する学会の学術大会・学会誌で発表し、幾つかの賞も受賞し、温かい評価をいただいたことは、昨日のことのよう思い出されます。一方で、顎関節症患者に対して、咬合とは異なる治療アプローチを模索するなか、私の入局前から講座で取り組んでいた心身医学的手法と認知行動療法にも注力することとなりました。EMG バイオフィードバック装置を何台か試作し、臨床研究に取り

掛かり始めた時点で明海大学に移ることとなり、岩手医科大学との共同研究プロジェクトとして継続することとなりました。また、機能と審美が補綴臨床の根幹であるとの信念から歯科審美学にも研究、臨床の軸足を置き測色を中心とした研究やジルコニアをはじめとする修復材料の研究にも取り組みました。

振り返りますと、卒業と同時に日本補綴歯科学会に入会してから 42 年にわたり補綴の道に情熱を注いでまいりました。この間、理事 3 期、委員長 2 期、東関東支部長 2 期、支部学術大会長を 4 度務めさせていただきました。多くの会員の皆様に励まされ、支えられ、助け合いながら、後進の育成にも微力ながら力を尽くしてまいりました。医療人は恩師、先輩たちの薫陶を受け育っていくものです。若い先生達にも是非このバトンをつないでいただけるよう切に願っております。そして日本補綴歯科学会の更なる発展と一層の社会貢献を祈念申し上げ、謝辞と致します。



細川隆司

九州医科大学 名誉教授

このたび、学会特別功労賞という大変名誉ある賞を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。私は、これまで広島大学と九州医科大学において歯科補綴学の教育・研究に携わり、幾多の学生や大学院生とともに学び、臨床現場で患者さんと向き合って参りました。その歩みの中で常に感じてきたのは、私一人の力では何事も成し得ないということです。研究の推進も、教育の充実も、臨床の発展も、すべてはともに歩んできた教室員、多くの研究者や臨床医、そして学会の先生方のお力添えがあってこそ成し遂げられたものであることは間違いありません。

正直に言って、私は本学会において、特別な功労を示せたとは思っておりませんが、委員会の委員、理事や副理事長として、さまざまな学会活動に携わらせていただき、国内外の多くの先生方と議論を重ね、補綴学の将来を見据えた取り組みや JPR の編集に関わらせていただけたことは、私にとってかけがえのない経験となりました。今回の受賞は、私個人に与えられたものというより、これまでご指導くださった故内田泰也先生、赤川安正先生をはじめとする諸先輩方、ともに汗を流した仲間、多くの大学院生、そして学会全体のこれまでの歩みを含めてご評価いただいたものと受け止めております。

今後も、歯科補綴学の発展のために微力ながら尽力して参りますとともに、次世代を担う若い先生方がさらに活躍されることを心より期待しつつ受賞の言葉とさせていただきます。



水口俊介

東京医科歯科大学(現東京科学大学)
名誉教授

このたび日本補綴歯科学会特別功
労賞をいただき、心より感謝してお
ります。大学卒業後、全部床義歯の

教室に入局したのは、「臨床実習を通してわからなかったのは全部床だけだ！」という不遜な考えを持ったからです。卒業して勉強を重ねていくと全部床だけでなくあらゆる歯科の分野の難しさや素晴らしさを知って、そんな考えをしてしまったことに赤面をいたしました。そしてその全部床も40年たっても全部理解できたわけではありません。今でも日々新しい気づきがあり、臨床の深さや面白さを感じています。

卒業後は早々に離島の歯科医となり、晴釣雨診でのんびりやりたいと思っていたのですが、定年まで大学に在籍した大きな理由は、難しい全部床義歯の製作を数値で表現することができるようになれば、誰もが簡単に良好な義歯が作れるようになるのではないかと、義歯の周囲組織の機能や咬合の要素が義歯の形態を決定するのだからそれらを解析すれば可能になるのではと思いつけたからです。多くの方々のご協力、ご尽力によりデジタルデンチャーや口腔機能の研究はかなり進んできましたが、まだ最終形にはなっていないと思います。高齢者の残存歯数も増加しましたが、義歯で困っている高齢者はまだ多く存在します。またその中には多くの要介護者が含まれますので早く実現させなければならないと思います。本会の責任と本会への期待は大きいと思います。



横山敦郎

北海道大学大学院歯学研究院口腔機
能補綴学教室

この度は荣誉ある日本補綴歯科学
会特別功労賞を賜り、大変光栄に存
じます。代議員(評議員)として

18年、理事として14年間会務に携わり、JPR編集委員会、編集委員会、規程検討委員会、専門医認定委員会、総務、財務委員会を担当致しました。その間、学会事務局は、駒込、新橋、田町と移りましたが、初めての委員会で事務局の場所がわからず、駒込駅から事務局に電話し、駅近くまで迎えに来ていただいたことを懐かしく思い出します。また、若い会員の方には信じられないことかもしれませんが、発刊直後のJPRには原稿が集まらず、次号の原稿をどうするか悩んでいたことも、今では良い思い出です。総務、財務担当時は、COVID-19の時期と重なり、2020年の定時総会は初めてのハイブリッド参加型開催となり、会場の出席者は理事長含めて数名でした。私自身も、当時、出張は認められておらず、病院長に事情を説明して許可を得て、横浜の会場まで行きましたが、飛行機の乗客は、往復とも十数名とほぼ貸し切り状態でした。COVID-19のため会議等が開催できず、学会の予算執行も難しい状況でしたが、事務局の感染対策、web会議のための機器整備、データベース構築などに充てることができました。歴史ある本学会の会務に、わずかですがお手伝いさせていただきましたことは、私にとって大変貴重な経験でした。会員の皆様に深く感謝申し上げますとともに、本学会の今後ますますの発展を祈念し受賞の御礼とさせていただきます。



令和 6 年度 学術賞



鮎川保則

九州大学大学院歯学研究院口腔機能
修復学講座インプラント・義歯補綴
学分野

この度は日本補綴歯科学会より栄えある学術賞を授賞いただき、誠に光栄に存じます。本賞は平成 29 年度に開設された賞であり、第一回受賞者である師、古谷野 潔先生に続く受賞は私にとって大変感慨深いものとなりました。また、指導を仰いだ諸先生方や共同研究者、学生の皆さん、臨床に協力して下さった歯科技工士やスタッフの皆さまに深く感謝いたします。

本学会は、常に新たな知見を共有し、議論を通じて歯科医療の未来を築いていく場として、私自身の研究活動にも多大な影響を与えてくださいました。このような場で認めていただけたことに、身の引き締まる思いです。

私の研究の主要なフィールドはインプラントの生体適合性ですが、古谷野先生の教えである臨床の疑問に切り込む姿勢をもって今後も幅広く研究を推進する所存です。今後は本賞に恥じぬよう、臨床と研究の両面において更なる探究を続け、次世代の補綴歯科医療の発展に少しでも貢献できるよう尽力してまいります。最後になりますが、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます、受賞のご挨拶とさせていただきます。



池邊一典

大阪大学大学院歯学研究科有床義歯
補綴学・高齢者歯科学講座

このたび、令和 6 年度日本補綴歯科学会学術賞を賜りましたことは、身に余る光栄であり、これまでご指導・ご協力をいただいた多くの皆様に心より御礼申し上げます。私は有床義歯補綴学・高齢者歯科学の立場から、咀嚼機能に影響を及ぼす口腔および全身の因子を明らかにし、高齢者における口腔と栄養摂取、心身機能との関係を探求してまいりました。

1999 年に米国アイオワ大学の Ettinger 教授のもと

に留学したことは、私の研究人生における大きな転機となりました。その後、1990 年代から注目してきたデータサイエンスの手法を活用し、医学や心理学の研究者と連携しながら、健康長寿/幸福長寿の要因を探る大規模縦断研究を展開する機会に恵まれました。近年は特に、口腔機能と認知機能の関連に焦点をあて、歯の喪失や咀嚼力低下が認知症リスクに及ぼす影響、栄養や社会交流などそのメカニズムの解明を目指しています。

これらの研究は、講座内外の多くの共同研究者の力に支えられてきたと同時に、長年にわたりボランティアとして参加して下さった研究対象者のご協力なくしては成し得なかったものです。そのご厚意に心から感謝申し上げます。

今後は、後期高齢者 20 万人単位のビッグデータ解析などにも取り組み、得られた知見を社会に還元するとともに、次代を担う後進の育成に力を注ぎたいと考えております。本受賞を励みに、補綴歯科学の更なる発展と健康長寿社会の実現に資する研究を続けてまいります。



江草 宏

東北大学大学院歯学研究科 分子・
再生歯科補綴学分野

このたびは、令和 6 年度公益財団法人日本補綴歯科学会・学術賞という栄誉ある賞を賜り、身に余る光栄に存じます。ご推薦くださった先生方、また長年にわたりご指導とご支援を賜りました諸先生方、共同研究者、教室員、そして多くの大学院生の皆様に心より感謝申し上げます。

私はこれまで、分子生物学を基盤として口腔組織の再生や骨疾患の分子機序解明に取り組み、それらを歯科補綴学へ応用することを目指して研究を進めてまいりました。歯科補綴学は、単に「失われた形態や機能を補う」学問にとどまらず、基礎と臨床の橋渡しを通じて、新たな診断予測や治療的介入を基盤とした、ライフステージを考慮した先制医療の体系を生み出す可能性を秘めています。今回の受賞は、私個人の業績というよりも、こうした学際的挑戦を支えてくださった研究仲間と築き上げた共同の成果であると考えております。

また、これまでの歩みの中で痛感してきたのは、若手研究者の自由な発想と粘り強い探究心こそが、新た

な分野を切り拓く原動力であるということです。次世代を担う若い先生方には、ぜひ歯科補綴学というフィールドの広がりを感じながら、自らの専門を越えて学際的に挑戦していただきたいと願っています。

本賞を励みとし、今後も歯科補綴学の更なる発展に尽力し、社会に貢献できる研究を推進してまいり所存です。引き続きご指導ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。



大川周治
明海大学名誉教授

この度、令和6年度日本補綴歯科学会学術賞を賜りました。大変光栄に存じますとともに、私を本賞の候補者としてご推薦そしてご承認いただいた本学会の諸先生方に対しまして、心より感謝申し上げます。

「実験計画の立案は、治療計画の立案と同じである」、すなわち、「研究テーマ着想から論文作成までの流れを修得することは、問題解決型臨床技能修得の基礎になる」、という“研究における基本理念”（私見）を基に、広島大学歯学部歯科補綴学第一講座、呉共済病院歯科（広島県呉市）そして明海大学歯学部歯科補綴学講座に所属して45年間、研究活動に従事してきました。主たる研究テーマは「咀嚼筋機能に関するスポーツ医学的解析」、「咀嚼機能に関する客観的評価法の開発・応用」、「垂直的顎間距離決定の基準下顎位に関する研究」および「味覚機能のスクリーニング検査法の構築と応用」等で、学会発表とともに235編の学術論文として公表してきました。特に、咀嚼筋とスポーツに関する研究の成果は、テレビ（NHKニュース、RCCテレビ）、新聞（共同通信、時事通信他）、ラジオ（RCCラジオ）等で報道されました。これらの研究成果が、国民の健康増進の一助となりましたら幸いです。

末筆ながら、私を学術研究の世界へと導いていただいた岡根秀明客員教授（明海大学）に、この場をお借りして厚くお礼申し上げますとともに、本学会の益々の発展をご祈念申し上げます。



大久保力廣

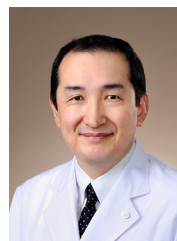
鶴見大学歯学部口腔リハビリテーション補綴学講座

この度は（公社）日本補綴歯科学会の学術賞にご選出いただき大変光栄に存じます。

振り返れば、大学院生時代に恩師の尾花甚一教授から壊れない義歯について考えてみなさいとご指示をいただき、他大学の建築学教室に足を運びながら、「義歯の構造設計」に関する力学的検討を始めたのが私の研究生活の第一歩でした。以来、大学院の後輩たちと一連の研究を行い計14編の論文にまとめてきました。臨床評価も加えながら、現在ではデジタルテクノロジーを導入した「義歯の最適設計」へと進化してきていますが、残り少ない大学の研究生活で何とか耐久性と安全性を両立した義歯のデジタル設計を実現するよう尽力したいと思っております。

一方、1996年にアメリカテキサスにある Baylor College of Dentistry の生体材料学講座に留学し、Toru Okabe 教授のご指導を仰ぎながら、歯科用チタンの基礎研究を始めました。以前より細井紀雄教授の下でチタン床義歯やチタンインプラント上部構造を積極的に臨床応用しており、チタン補綴装置の有効性を確認しておりましたが、約30年後にチタンクラウンが保険収載されたことに当時の研究の苦労が報われた気がします。

最後になりますが、今回の受賞はこれまで当講座で実施されたすべての研究に対して与えていただいた賞であり、私の臨床的興味を具現化し研究協力してくれた医局員や大学院生に心より感謝申し上げます。



窪木拓男

岡山大学学術研究院医歯薬学域
インプラント再生補綴学分野

この度は、栄えある日本補綴歯科学会学術賞を頂戴し、関係各位に感謝致します。我々の年代においては、授賞の機会が比較的少なかったため、このような賞をいただくことは多くなく、本当にうれしく思います。今から思えば、40年間学術活動を行っていましたが、あっという間でした。臨床をしながら、毎日睡眠時間を削って教育研究に励みました。学術大会ではその結果を発表し、同じころごしを持つ他大学の

先生と夜は議論に花を咲かせ、杯を乾かしました。仮説を立て、それを検証するための実験を立案し、神様の手の内をほんの少しだけ見せていただいた時の感動は本当に計り知れないものでした。補綴臨床や歯科補綴学にはまだ解けていない課題が多数あります。例えば、インプラントの周囲骨の萎縮や特発性歯槽骨萎縮、サルコペニアや掌蹠膿疱症、薬剤関連顎骨壊死の問題、脳卒中や精神疾患患者の根面カリエスの問題、認知症やパーキンソン病と口腔機能の関係など社会問題が多々残っています。これらの問題を臨床疫学研究で全体感を明らかにしながら、生物学的な研究で因果関係を明らかにし、数ある創薬ポイントの中からベスト介入ポイントを発見し、社会実装する必要があります。これまでの日本補綴歯科学会の歩みは、これらの新しい治療法を可能とするうえで、世界で最も可能性がある学術団体だと思っています。日本補綴歯科学会の若手の先生方によってこれらの問題が解決に向かうことを心から願っております。この度は、本当に有難うございました。

**澤瀬 隆**

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
口腔インプラント学分野

この度、栄誉ある日本補綴歯科学会学術賞の受賞大変嬉しく思います。いつの日かはノミネートされたいと目標にしていた賞でした。まだまだ実力不足で一層の研鑽が必要だと思っていましたところ、この度受賞者の末席に加えていただくことができ本当に望外の喜びです。大学院時代から終始インプラントに関わる研究を続けて参りました。特にこの10年間のインプラント周囲骨骨質に注目した研究は、教室独自の研究としていくつかの新たな知見を見いだすことができ、さらには、臨床系の教室で研究を重ねる中での夢でありました製品開発にもつなげることができました。今回の受賞は、これまでの集大成として、私が代表していただいたものと認識しています。この間、教室の先生がた、多くの大学院生はもとより、学外そして企業と多くの研究者の方々との幸運な巡り合わせがあり、たくさんのご指導、ご協力、ご尽力を賜りました。この場をお借りして、あらためて心からお礼申し上げます。

さて、なんだかもう退任するかような振り返りの話になってしまいましたが、まだもう少し時間がありそ

うです。もう一花咲かせることができるよう尽力するとともに、学生や若手へ研究の喜び、補綴臨床の楽しさを精一杯伝えていきたいと思います。

**津賀一弘**

広島大学大学院医系科学研究科先端
歯科補綴学

このたび、令和6年度日本補綴歯科学会学術賞を賜り、大変光栄に存じます。

1985年に広島大学を卒業して以来40年、歯科補綴学の診療・研究に携わってまいりました。大学院では津留宏道先生のご指導のもと、長澤 亨先生、赤川安正先生、大川周治先生、佐藤裕二先生、皆木省吾先生に見守られながら、下顎運動と咀嚼筋表面筋電図を用いた研究に取り組みました。当時はパーソナルコンピュータが普及し始めた頃で、分析のプログラミングに没頭した経験が、今も研究基盤の一つとなっております。

1995年には文部省在外研究員として、スウェーデン王国イエテボリ大学のGunnar E. Carlsson 名誉教授、Stig Karlsson 教授のもとで、高齢者の口腔機能と全身の健康に関する研究を行いました。留学に際しては佐藤博信先生に大変お世話になりました。幸運にも電子メールが一般化し始めた時期であり、世界中の研究者とつながる利便性を実感したことを覚えております。

帰国後は赤川安正先生のご鞭撻のもと、今日まで多くの先生方、同僚・後輩、企業や行政の皆様にご指導・ご協力を賜り、口腔機能療法やCAD/CAM 歯科材料の社会実装につながる学術研究に従事することができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

今回の受賞を励みとして、今後も人類の幸福に少しでも寄与できるよう研鑽を続けてまいります。引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。



松香芳三

徳島大学大学院医歯薬学研究部顎機能咬合再建学分野

この度は令和6年度日本補綴歯科学会学術賞に選出していただきまして、大変光栄に感じております。表彰状を拝見しますと、私のいただいた番号は若い番号であり、長い歴史のある日本補綴歯科学会において、学術賞を受賞したことは栄誉なことであると感じています。本受賞は、これまでの私の研究業績に対して頂戴したのですが、ご存知のように、研究、論文執筆は仲間とともに実施するものであり、これまで一緒に研究していただいた多くの先生方に変え感謝しています。これまでの私の研究は、顎機能、顎関節症、口腔顔面痛などが主のものであり、世界的には歯科補綴学ではないと認識されるかもしれないものです。しかしながら、日本補綴歯科学会は懐の深い学会であり、どのような分野の研究も受け入れていただけることにも感謝しております。

若手の先生方では、大学でのポジションアップを狙っている先生も多いと思います。そのような先生方におかれましては、地道に研究を継続していただき、論文作成、科学研究費獲得を続けられることを望んでいます。また、一般臨床家の先生方は研究とは関係がないと認識されているかもしれませんが、ご自身の優れた臨床成績を世界に公表することを検討していただきたいと希望しています。日本補綴歯科学会会員の研究が世の中のためになることを期待しています。

最後になりましたが、この度は、日本補綴歯科学会学術賞受賞に際しまして、お世話になりました先生方に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。



山口泰彦

北海道大学名誉教授 / 歯学研究院招へい教員

この度は、学会学術賞を授与いただき大変光栄です。関係の皆様、会員の皆様に心より感謝申し上げます。

大学院の時の学位研究では、クラウン辺縁のエナメル質保存の重要性を示し、その後の歯科界でのMI、歯質保存の考えの普及に少しは貢献できたかと思っています。大学院後は、当時、大人気だった顎機能領域

の研究に手を付け、顎機能の維持における咬合の重要性や補綴治療におけるブラキシズムの診断評価の重要性を示し、ブラキシズムについては「睡眠時歯科筋電図検査」として保険収載にもつなげることができました。

しかし、歯質保存については、材料あるいは技術的な制約で歯質を大量に削合する術式は残っていて、近年はむしろ再び増えている感があります。咬合については、残念ながら顎関節症だけでなく普通の補綴治療の場でも咬合の軽視、あるいは咬合の知識不足の傾向が強まっている気がします。ブラキシズムについては、咬合崩壊症例に対し、「力の問題」とのコメントが散見される割には、本当に力の問題か、どのタイミングのどの程度の力かの客観的、定量的評価に基づき臨床を行うという診療体制はまだまだ広まっていないようです。

歯と咬合を守ること、そしてその維持のために「力の問題」を的確に診断評価し、対処することは、補綴はもちろん、歯科全体における本質的事項ですので、その重要性を皆さんに理解してもらえよう、さらに情報発信に努めたいと考えています。



若林則幸

東京科学大学医歯学総合研究科生体補綴歯科学分野

このたび学術賞を賜りましたこと、身に余る光栄に存じます。ご推挙くださった委員の皆さまに御礼申しあげますとともに、これまでご指導くださった諸先輩、ともに臨床と研究に励んできた同僚や教室員、大学の職員の皆様、多くの関係の皆様に、心より感謝申し上げます。

私が本学会に入会したのは1988年であり、すでに三十数年の歳月が流れました。その間、研究の潮流やテクノロジーの進化には目を見張るものがあります。そして、そのような進歩を教えてくれたのは、常に本学会の仲間であったと思います。学会のたびに得られた多くの知見や新しく感じたエネルギーが、今日の私の仕事に対する姿勢を形づくってきたと感じており、本学会は、切磋琢磨の機会と友情を育む場でもあったと思います。

補綴歯科学は、患者さんの生活の質に直結する学問領域であり、社会的使命の大きさを日々痛感しております。本賞の受賞は、私個人の成果というよりも、国

内・海外の基礎系・臨床系の多様な研究者の皆様，大学病院や地域医療に携わる共同研究者の皆様，そして若い頃の自分を成長させてくれた，たくさんの患者さん達であると考えます。

今後も，歯科医学とその教育の発展と後進の育成に

微力ながら尽力し，社会に貢献できるよう努力を重ねてまいります。最後に，本学会の更なる発展を祈念しつつ，改めて深甚なる謝意を表し，受賞の言葉といたします。